

一、JKクラブ

高校の先輩の真佐美さんが輪姦されたのは、新学期が始まって間もないころだ。彼女が犯されたことは公然の秘密と言ってもいい。

だって、その時のビデオが会員制エロサイトで公開されているんだから、否定も弁解もしようがない。誰が最初に見つけたのか、数日もしないうちにみんなの知るところとなってしまうた。

現場は繁華街に新しく出来たJKクラブ。状況は観客の目の前で公開輪姦。

「三年のちよつと取っつきにくい感じの人でしょ」

「へえ、あの先輩輪姦されちゃったんだあ」

あちこちで噂話に花を咲かせる生徒たち。

もちろんあたしも見た。『現役女子高生公開輪姦！』なんて派手なタイトルつきで、メ

ンバーじゃなくても三分くらいのサンプル版を鑑賞することが出来る。

間違いなく襲われているのは真佐美さんだった。

薄暗いボックス席で抵抗しながら下着を降ろされる様子。後ろから羽交い締めになれ、もう一人に太腿部分を抱えられて動けないように押さえられる。席の周りには、他のお客さんと思われる脚がいくつか映っていた。

スカートは抵抗するうちに捲れ上がってしまい、露出させられていく恥部を遮るものはなかった。

一瞬黒い恥毛が見えて、真佐美さんが必死で手を伸ばして下着をつかんで防御する。その手が引き離され、男が一気に下着を引きずり下ろした。

正面から見た感じ、恥毛はあまり濃くなかった。ワレメが軽く透けるくらい。

真佐美さんは二人がかりで身体を抱えられ、真ん中のステージへ。

バタバタ暴れる足先に引っかけかかった下着が旗みたいに揺れる。スカートが捲れたままなので、脚の付け根にワレメがくつきりと見えていた。

そして思い切り股をこじ開けられてのマンコ晒し。海外サーバーだから何もかも丸見えだ。

「嫌あああつ」「ひいいいいつ」「やめてええええつ」



「嫌あああゝあああああゝゝいいいいいい」

ほどなく、わけの分からない悲鳴と共に真佐美さんが太腿をピクピク痙攣させながら失禁した。イカされたのだ。

観客たちの拍手と笑い声。

カメラが膣穴に寄って、店の人が指を一本突っ込んだ。ひとしきり穴の中を探った指が抜かれると、指先が濡れている。膣穴も明らかに湿っていた。

その膣穴に、さらに大量のローションが塗られたくられ、ギンギンに猛った男根が迫る。中学生の時、教室でパンツ脱がされる男子のおチンポを目の前で見たことがあるけど、比較にならないくらい太いし大きい。あの女子たちの前で脱がされた哀れな男子のおチンポは、包茎で白くて可愛かった。でも画面のそれははつきり言ってグロテスクだ。

その太い男根が膣口にあてがわれ、腰を軽く前に出したただけであっさり穴に飲み込まれる。真佐美さんの身体がまたピクピク震えた。

犯される真佐美さんは少しの間抵抗したけど、やがて諦めたのか大人しくなった。感じてはいないと思う。茫然とした表情で天井を見つめ、何を思っているのか窺い知れない。腰の動きに合わせてオッパイがタプタプ揺れる——真佐美さんのオッパイは、出されてからずっと揺れっぱなしだ。

襲われてからここまでがおおよそ二分。

シーンが短いサイクルで切り替わり、輪姦現場を映し出す。

最初の男が息を大きく吐いて男根を引き抜き、白い腹の上に精液をぶちまけるシーン。待ちかねていた次の男が、湯気を立てる膣穴に男根を突っ込んで腰を振るシーン。

三人目の男が同じようにおチンポを突っ込むシーン。

それから大の字で横たわる真佐美さんの姿がアップで映し出された。着衣はほぼ脱がされ、残っているのは靴下と片方の靴と右足に絡まった下着だけ。制服とブラジャーはステージの上に無造作に散らばっている。

真佐美さんは犯されている最中と同じ表情のまま、脚を閉じるわけでもなく荒い息をついていた。

サンプル動画が真佐美さんの姿を映したままフェードアウトして終わると同時に、派手な入会案内画面に切り替わった。今なら半額キャンペーン中だそうさ。

あたしは画面を閉じた。

自己紹介が遅れたけど、あたしは二年生の真田遥<sup>さなだ はるか</sup>。これでも風紀委員長なんだ。

正直、うちの学園は偏差値レベルがそれなりと言うことで、下半身がらみの『事件』が多数を占める。

盗撮、輪姦、カイボウすなわちパンツ脱がし。その類いの雑多な事件。

でも真佐美さんの件は学園の外で起こったことなので、本人が言ってこない限り動かないのが風紀委員会としての慣例だ。余計なお節介はしない。

だから放っておいた。ただの女子高生輪姦事件、「お気の毒様」ってことで話は終わり。すると先月あたりから、うちの女生徒が例のJKクラブで乱暴される事件が五件も発生した。これは異常事態だ。

なかなか襲われた本人に話を聞くのは難しかったけど、みんな真佐美さんに誘われていたことが分かってきた。

あたしは、真佐美さんがJKクラブの人に無理に協力させられているんじゃないかと考えた。だって輪姦現場をビデオに撮られているし、ばら撒くと脅されて……いや、その線はもう手遅れだ。

それに、襲われた子がステージの上で裸に峯られるとき、また犯されるとき、真佐美さんが相手側にいたという証言もあった。

真佐美さんが積極的に連中に荷担しているなら、悪堕ちしたということ。

私があんな目に遭ったんだから他の子も。おそらくそんな動機だろう。

そうなってくると風紀委員の立場上、当然容認できない。

気が重かったけど、あたしは真佐美さんに直接注意することにした。こっちは二年生、

真佐美さんは三年生。話を聞いてくれたらいいけど……

結果、はぐらかされて終わりだった。真佐美さんも事件が広まっていることを承知していて、「あなたたちには関係のないこと」とか「私に構う暇があったら他の仕事をすればいい」とか。

あたしは今度あのJKクラブで事件があったら、顧問の先生を交えて本格的に調査を開始すると告げて引き揚げてきた。学校側の手が入ると言うことは、退学あるいは停学処分を覚悟してねと言っているのと同じだ。

真佐美さんもこれで大人しくなってくれるだろう。あたしはそう期待した。

ところがその翌日にまた輪姦事件が発生した。一年生の女生徒が二人まとめて例のJKクラブで犯されてしまった。ステージに上げられてヒン剥かれて公開輪姦。その現場にも真佐美さんの姿があったという。

宣戦布告か……

もう一度だけ真佐美さんに警告しよう。それでも聞き入れないなら仕方ない。学校側に報告する。あたしは心を決めた。

二、痴漢される

夜になってスマホにメールが届いた。驚いたことに真佐美さんからだった。

生徒会関係者の連絡先はみんなに配布されているからアドレスを知っていることに不思議はないけど、友人や家族以外から実際にメールが届くのは初めてだった。

『私に話があるんじゃないの』

『当然でしょう』

『話を聞いてあげてもいいわよ』

『お願いします』

『じゃあ、いつもの電車で』

短いやりとりだった。

あたしと真佐美さんは、毎朝同じ通勤快速電車に乗る。あちらもあたしが同じ中学出身である事を知っているみたいだ。

そして翌日の朝。真佐美さんの方からあたしの姿を見つけて近づいてきた。こちらが後輩なので、一応ちゃんと頭を下げて挨拶する。

車内は真佐美さんと身体がくっついたまま身動き出来ないほどのすし詰め状態だった。

混雑する路線だけど、ここまで混むことはあまりない。

真佐美さんの体温と胸の膨らみが布地越しに伝わってきて、つい輪姦現場の映像を思い浮かべてしまう。ああ、このオツパイが揺れていたんだなって。

ちよつと生々しい感触で、同性なのにドキドキしてしまった。

それはさておき、話は駅に着いてから学校に向かう間にしようと思った。話がこじれて周囲の人に変な目で見られたくなかったし。

ところが……

スカートの中に手が入ってきたのは、発車してすぐだった。

やだ痴漢!? あたしは青くなった。

あたしは真佐美さんにどう話をするかで頭がいっぱいで、周囲に気を配っていなかった。普段は怪しい男の人を避けているんだけど。

この通勤快速電車は次に扉が開くまで十五分は止まらない。身動きすらままならない中で痴漢に捕まってしまった女に逃れる術はないのだ。しかも目の前には真佐美さんの顔。

下着を下に引っ張られる。駄目、駄目、やめてっ。

太腿をずるずると下着が滑り降りていく感覚。下半身がサーツと涼しくなった。

あたしはお尻を振り、脚を固くよじり合わせてガードした。

「どうしたの」

真佐美さんがあたしの様子を見ていた。

「何でもないです。は、話は駅に着いてから」

「そう。私はここで構わないけど、真田さんがそうしたいならいいわよ」

「は、はい、あの、ううっ」

陰裂の中に潜ってきた指先に中身を探られ、言葉にならない。

スカートの中に入っている腕は、横と後ろから一本ずつ。それとは別に、制服の裾から胸に触ろうとして這い上ってくる手もあった。

「くひっ」

スカートの中に侵入した手を捕まえて引き離そうとしたけど、逆に後ろ手に手首を取られて動けなくなってしまった。

敏感な部分をまさぐられる衝撃に、太腿の筋肉が引きつけるみたいに震える。

クリトリスを探して動き回る指先。焦るあたし。

腕は捕まえられたまま、力を込めてもびくとも動いてくれなかった。

ヤバイ、ヤバイ！ 必死で太腿を固く閉じる。でもどんなに脚を閉じて頑張ったところで、女体の構造上防御できるはずがない。

「うっ、ひいっ」

ワレメの上端から少し下がったあたりを執拗に探られる。あたしは身をよじり、地団駄足踏みするばかりだった。

「ひいい」

クリトリス器官を見つけられてしまうのに十秒とかかかっていないはず。

ワレメの内側で、包皮を「くいっ」と上に引っ張られた。簡単に剥けてしまうあたしのクリトリス。

「ああ、そういうこと」

真佐美さんが下を向いて状況を確認し、クスリと笑った。きっとあたしのスカートの中に手が入っているのが見えたんだと思う。すでに下着を降ろされていることも。

「可哀想に。この路線って痴漢が多いよね」

真佐美さんの声は落ち着いていた。

「な、何でもないですからっ」

「風紀委員なんだから我慢しなくちゃ。それとも私が大声出してあげようか？ 痴漢行為は収まると思うけど、その後がいたたまれないんじゃないかな」

「お願いだからそれはやめてくだ…あああっ」

腰にピクリと震えが走った。剥き豆を指で挟まれてしまったのだ。

「我慢するの？ そうよね、野次馬の視線を浴びるのは恥ずかしいよね」

クリトリスの根元をガッチリと捕らえられて揉み転がされ、あたしはのど元まで上がってくる悲鳴を押さえつけながら、何度も頷いた。

どうして真佐美さんじゃなくてあたしなの!? どうしてあたしだけが狙われたの!?

「ああっ」

腰を振って逃れようとしても指先は離れず、クリトリスを弄られ続ける。

「その様子じゃ我慢出来なさそうだけど、何されてるの? 大声出して楽になった方がいいんじゃないかしら」

「が、我慢出来……ます……うひっ」

あたしはかろうじて返事をした。生クリに触れられる強烈な刺激に、瞼の裏がチカチカする。

「くううっ」

クリトリスは敏感な部分だから、いきなり触られたってちつとも気持ちよくなかない。気持ちいいどころか、痛いと表現する方が当たっている。だけど、痴漢の指に片時も休まず揉み込まれたら……アウトだ。どうしようもない。

事実、粗雑な刺激が痺れるような快感に変化しつつあった。

あたしの意思とは無関係に、太腿の筋肉がヒクヒクして止まらなくなる。

「あひっ、駄目っ」

後ろから入った手に膣穴に指を入れられた。

クリトリスを摘まんでいるのは、多分横の背広を着た男。

制服の下で胸まで揉まれ始めた。乳首も摘ままれてる。きっとブラをずらされてしまったんだろうけど、直す余裕なんかなかった。

このまま弄られたらイッてしまう。

どうしよう、どうしよう気持ちちは焦るけど逃れる術はない。

「うううっ」

正面の真佐美さんと目が合った。あたしの様子をじつと観察している。

悔しい、イカされてなるものか。こめかみを汗が伝う。あたしは天井を仰いで気を逸らそうと頑張った。

一番敏感な部分から断続的に伝わる信号を処理しきれず、脳髓が麻痺しそう。

視界の隅を流れる外の景色が、イライラするほど遅く感じられた。

「立っているのが辛かったら、私にもたれかかっついていいわよ」

「……だ……大丈夫……です」

「そうかしら。真田さん、あなたマンコを弄られてるんでしょ」

「……そ、そんなこと……ないです」

電車は走る。のろのろ走る。

いつもと同じなんだろうけど、すごく遅く感じられた。一刻も早く駅に着いてくれないとあたしが持たないのに。

「ああっ、はううっ」

腰から下が痺れたようになり、快感信号は激しくなるばかり。あたしが恐れていた事態だ。

一旦身体が快感であることを認識してしまうと、それは断続的にあたしを責めさいなむトゲになった。

「くふうっ」

何とかして指を振り払わなくては。あたしは焦った。

だけどあたしに出来ることは、せいぜい腰を振るか身体をひねるか。もちろんそんな事じゃ指は離れてくれない。膣穴の入り口をしつこくまさぐられるのも地味に効いてきた。

「うううっ」

イカされたくない。頭を振って耐える。

「ねえ、どこを弄られてるの？ もしかしてクリちゃん？ だったら我慢なんて無理だと思うけどな」

あたしは首を振った。

どうして女のクリトリスって、こんなに小さいのに持ち主を狂わせるほど敏感なのだろう。う。

「大丈夫？ オッパイ出されちゃったわよ。隠さなくていいの？」

「あああっ」

いつの間にか出されてしまったようだけど、オッパイどころじゃなかった。

下に視線を向けると、確かにペロンとはだけられたオッパイが見えた。何だか自分のものじゃないみたいな感覚。

「恥ずかしい子ねえ、こんな所でイタズラされちゃって」

「くふうっ、あひっ」

あたしは風紀委員長なんだから、痴漢に遭うのは不可抗力でも、イカされるなんてもつてのほか。何度も何度も自分に言い聞かせた。

でも、そんなちっぽけな建前なんか吹っ飛んでしまうほど、快感は強烈だった。

それはそうだ。風紀委員長の肩書きなんかこんな状況の中じゃ何の役にも立ちはしない。「やらしい子。乳首立ってるんだけど？」

「んひいっ！」

真佐美さんに何か言われたけど反応できなかった。

イカされる！ イカされてしまう！

膝が笑う。揉まれ通しのクリトリスが熱かった。強烈な快感に腰砕けになりそうだ。

「あふっ」

通過駅の看板が目に入った。次の駅まで半分も行っていない。

この先、どれだけ駅があっただろう。片手じゃ全然足りないはず。絶望的な現実に気が遠くなりそうだ。

それでもあたしは頑張って耐えた。それしかないのだ。

「うううっ」

とにかく猛烈な快感。あたしを見つめている真佐美さんの顔がゆらゆら揺れる。根元を摘まみ上げられたクリトリスをコリコリ揉み込まれる状況は変わらない。

「あううっ」

ヒクヒクする太腿の震えを制御できなくなった。

もうあたし駄目かもしれない。そう思った瞬間、不意に身体が突っ張った。

「あっ、あっ、ああっ」

たまらず声が出てしまう。

「もう、真佐美さんったら仕方ない子ね。そんな声出したらみんなに分かっちゃうわよ」息苦しくなって焦点を目の前に合わせると、真佐美さんに口を押さえられていた。

「ほら、こうして上げて上げるから、思い切りイッちやいなさい」

「んはあああああっ」

猛烈な快感に圧倒され、勝手に身体が反り返ってしまふ。

ビクンビクン。ビクンビクン。

クリトリスが熱い。膣穴が熱い。乳首が熱い。何もかも熱い。

あたしは痴漢にイカされたのだ。真佐美さんの前で完膚なきまでに。

「んんんんっ！」

痴漢がクリトリスを放してくれないので、息つく間もなく二度目の絶頂が襲ってくる。

「ふふっ、アへ顔晒しちゃって。そんなに気持ちいいの？」

「んんんっ！ んはあっ！」

真佐美さんにはしたくない顔を観察されていることは分かっていた。分かっていたけど、どうしようもなかった。

クリトリスを弄られ続けて脚ががに股に開き、勝手に痙攣する身体は宙に浮いているかのように。自力で立っていることが出来ず、イカされながら真佐美さんにもたれかかる。

ふと下を向くと、露出させられた乳房を揉まれていた。

揉まれてひしゃげるあたしの乳房。乳首がピーンと立っている。

でもイカされ続けるあたしは、乳房を気にするどころじゃない。

何度でも襲いかかってくる強烈な快感。どうしても声が出てしまう。

自分が女であることが恨めしかった。

「んんんっ！ んんんんんっ！」

「あらら、オシッコ漏らしちゃった？ 困ったちゃんね」

真佐美さんが笑っていた。

失禁した自覚はなかったけど、確かに太腿から足先に向かって生暖かくなった気がした。

「そんなに気持ちいいの。嫌らしい子」

真佐美さんは痴漢されるあたしの姿を楽しんで観察している。そう思うと悔しかった。だって女の子を何人も騙して輪姦させるような人なのだ。

きつといい見物だったろう。

「んはっ」

その真佐美さんに口を塞がれ、醜態を晒すあたし。

「くううっ！」

視界がかすむ。

ビクン、ビクン。身体が電気に触れたみたいに震えて止められない。

クリトリスは弄られ通した。

ほぼ、イキッ放し。

いくつ駅を過ぎたのか、どのあたりを走っているのか、まるで分からなかった。

「んはあああああ……」

「また失禁？ あなたにはオムツが必要かもね」

あたしはきつと真佐美さんにしがみついてアへっていたのだらうと思う。

真佐美さんの顔が本当にすぐ目の前にあって、何か言っていた。

「くひいいい」

でももう、あたしは何を言われているのか聞き取ることが出来なかった。

口を塞がれているせいで息苦しい。

車内アナウンスよりも自分のくぐもったよがり声の方が大きかった。

「ひいいっ、んひっ、んひっ」

とにかく気持ちよかった。

両乳首も摘ままれていたらしく、そちらからもツンツン快感が伝わってきた。

これだけイカされたのだ。もしかしたら乳汁を垂らしていたかもしれない。

膣穴は間違いなくお汁まみれに違いない。

「んはっ、くふっ、んひい、んひい、んひいっ」

風紀委員だろ何が何だろうが、女は女。発狂しそうな快感に悶え続ける。

そして……すべてが暗転した。

あたしは気を失ったらしい。

夢を見ていた。

夢の中で、あたしはもう一人のあたしに責められていた。

風紀委員のくせになんて無様な。どんな顔をして仕事を続けるつもり。だって仕方ないじゃない、あたしは悪くない。

分が悪いことは分かっていたので、小声で言い返しながらも一人のあたしから逃げ回る。

それに、夢の中でもあたしは女性器にイタズラされていた。

逃げても隠れても、どこからともなくスカートの中に手が入ってきて、あたしの『娘』を弄り回す。

膣穴に突っ込まれた指先を引き抜こうと手を伸ばしたが届かず、しつこさに痛癢を起こしてジタバタ暴れても弄られ通し。

ああ、またクリトリスを弄られている！ どうしてそうやって弱い所ばかり狙うのよ！ 嫌なのに気持ちいい。身体がピクピクする。

「ううっ、やめてっ」

またイカされるの？ もう勘弁して。

うなされた末に目を覚ますと、そこは学校の保健室だった。

「そっか、あたし……」

もちろん痴漢された事は覚えていた。途中から記憶がないけど。

おそらく気を失った後、真佐美さんが運んでくれたのだろう。

ベッドから身を起こそうとしても力が入らない。いわゆる腰抜け状態だ。

「うわ……」

毛布をはぐったあたしは愕然とした。

臍から下の着衣がないのだ。下半身丸裸。

しかも乳房がペロンと露出している。

あたしは慌ててはぐりかけの毛布で身を覆った。

「……」

あたしは自分の股間に指を伸ばしてみた。

あんな目に遭った後だ。きつとひどく濡れているはず。

そう思ったけど、あたしの女性器は綺麗に『お掃除』されていた。

一体誰に？ 保健の先生、それとも真佐美さん？

どっちだったとしても、顔から火が出そうな恥ずかしさだった。

だって痴漢されてイキまくってお汁まみれになったマンコなのだ。

クリトリス包皮なんかめくれてしまっていただろう。絶対に同性に観察されたくない惨状だ。

「目が覚めた？」

ドアが開いて真佐美さんの声が聞こえた。

手にしている洗面器とタオルを見たとき、あたしは悟った。やっぱり真佐美さんに手当てされたのだと。

「あ、あの……」 あたしは口ごもりながら毛布をたぐり寄せた。

「しばらく立ってないと思うから、そのままゆっくり休むといいわ。ちなみにスカートと下着は洗濯中よ。失禁とお汁ですごいことになっていたから」

「……」

もうまともに真佐美さんの顔を見ることが出来なかった。

輪姦事件の件で真佐美さんに警告ですって？ どの面下げて？

あたしは頭の上まで毛布をかぶって黙るしかなかった。

### 三、真佐美先輩

その後も、例のJKクラブでうちの女生徒が犯されたという話がちらほらと聞こえてきた。大体週に一度くらい。

それが多いのか少ないのかはともかく、あたしは沈黙を決め込んでいた。

風紀委員なんだから何とかしなければ。そんな事は分かっている。分かっているけど、真佐美さんの前に出る勇気がなくて、ぐずぐずしていた。

今日は会議があるからその後で考えよう。先に顧問の先生の頼まれ事をしなくちゃ。風邪気味だからまた今度。

それに、これだけ噂が広まっている中で真佐美さんに付いて行って輪姦されるなんて、被害者にも問題があるのではないか。もしかしたら、分かっている誘いに乗ったのかもしれない。冒険してみたかったとか、エッチな気分だったとか。そんなのまであたしが構ってられない。

言い訳なんかいくらでも思いつく。

「真田さん、私に話があるんじゃないやなかったの？ ずっと待っているんだけどな」

しばらく大人しくしていると、あちらの方から声をかけてきた。

まさか真佐美さんが風紀委員の部屋にやってくるなんて。完全に想定外だった。

「え、ええと……その……」

あたしは無様にうろたえるばかりだった。真っ赤になった顔を見られたくなくて、下を向いて書類を探すふりをする。

「痴漢されちゃったこと、まだ引きずってるのかな？」

真佐美さんがクスクス笑った。

「そ、そんなこと！ い、忙しかっただけですっ」

「そうかしら？」

完全に心の中を見抜かれている。穴があったら入りたい恥ずかしさだった。

「クリトリスを生で弄られちゃったんだもの、仕方ないわ。私だって同じことされたらイクわよ。オシッコ漏らしてヒイヒイ声出して」

「そ、そ、それは……あたし……」

何も言えなかった。言葉が出てこないまま、口だけパクパク。

「真田さん、いい顔してイッてたわよ」

「！」

真佐美さんは明らかにあたしをからかって楽しんでいた。

まったく、どれだけねじれた性格をしているのだろう。

「不満なの？ 事実でしょ。じゃあ訊くけど、仮に痴漢の手が私のスカートの中に入って

いたら、あなた私を助けてくれた？」

思わず睨むと真佐美さんが言った。

「え？」

「あの状況で出来ることと言ったら、大声を出すか耐え抜くか二つに一つ。注目を浴びて恥をかくくらいなら、我慢してみせる。私だってあなたと同じようにそう考えるもの」

「……」

「結果的にあなたは、イカされる私の姿を見物することになると違うかしら」

「……」

確かにその通りだろう。だって何も出来ないんだから、そうなるしかない。

真佐美さんとあたし。女の子が二人いてあたしだけが被害に遭った。つまりあたしの運が悪かったということ。

「ふふ、あまり気に病まないことね。あの時のことを思い出してオナニーしてるんじゃないの？」

「し、してませんっ」

あたしは立ち上がって叫んだ。

「私のはあのJKクラブで最初に輪姦された後、オナニーしたわよ。犯されたその日の夜に。ねえ真田さん、あなたJKクラブに来てみない？」

「は、はあっ？」

この人は一体何を言い出すんだろう。あたしはこれでも取り締まる側なのに。

「最初は抵抗するでしょうけど、必ず気持ちよしくしてあげるからさ。私が保証するわ」  
 「お、お断りしますっ！ わざわざ強姦されに行くなんて！」

あたしはまた叫んだ。

「あなたもどうせ、私があそこで輪姦された時のビデオを見たんでしょ？」

真佐美さんは顔色一つ変えずにあたしを見つめた。

「そ、それは……職務上確認しておく必要があつて……」

「どうだか。まあいいけどね、みんな知ってることだし。本気で悲鳴上げて抵抗していた  
 はずの女がイキまくってヒイヒイ叫ぶんだから笑っちゃうでしょ」

真佐美さんは自嘲的に唇をゆがめた。

「押さえつけられてでもクリトリスを弄られちゃったら女は終わり。あなたも体験した通  
 りよ」

「……」

「……ま、今日の所はいいでしょ。私に話があるなら、いつでも聞くから」

真佐美さんは含み笑いを残して出て行った。

「……」

後ろ姿を見送り、のろのろと腰を下ろす。

動悸が収まらない。額に手を当てると冷や汗で濡れていた。

その日の夜、あたしは真佐美さんの輪姦ビデオがアップされていた会員制サイトに行っ  
 てみた。

いいようにあしらわれて手も足も出さず、モヤモヤした気分だった。

真佐美さんの哀れな犯され姿を見てやれば少しは溜飲が下がる。そんな気がしたのだ。

そして、サンプル動画のリンクをたどって目に飛び込んできたのは「新作！ 女子高生  
 絶頂痴漢地獄」の文字。

「ああっ!？」

思わず声を上げてしまった。

だって、刺激的な宣伝文句と裸だらけのバナーで埋め尽くされたサンプルページに掲載  
 されている紹介画像の女の子は、他ならぬあたしだったのだ。

真佐美さんと二人で電車を待っている様子を、斜め横から撮ったものだった。

もちろん目線にモザイクが入っている。

どういうこと？ 訳が分からないけど、モデルは間違いなくあたしだった。

ドキドキしながらバナーをクリックする。

「うっ……」

画面の上半分を占める画像にあたしは声を失った。

真下から見上げた、大寫しのスカートの中。膝まで降ろされた下着が手前でぼやけている。

剥き出しの女性器にピントが合っていた。見慣れた自分のマンコだけど、こんな角度で見るのは初めてだった。海外サイトだからいわゆる無修正というやつだ。

陰裂に潜り込んだ指に、クリトリスを根元から摘まれた状態。すっかり剥けてしまったクリトリス龟头部が、指の間に挟まれてひしゃげている。

太腿の内側が光っているのは、失禁の痕跡だろう。

情けないことに、あたしの膣穴は白っぽく湿っていた。濡れていることがはっきりと分かるレベルだ。

捲れたスカートの向こう側に見えるのはボロンとはだけられた乳房。これまた情けないことに、あからさまに乳首が立っていた。

ずらされたブラの陰になって、顔が見えないのがせめてもの救いだっただ。

痴漢に蹂躪される自分の姿が、ネットに晒されてしまうという事実。

あの時のあたしがどうなっていたのか、思い知らされて余りある証拠写真だった。

それからあたしはサンプル動画を再生してみた。迷いはあったけど見ずにいられなかつた。

た。

まずはスカートの中に入った手に下着をズルズル降ろされていく様子。

焦ってお尻を振りながら必死で太腿を合わせているけど、まるで防御になっていない。

こんなに簡単にマンコを出されてしまうなんて。悔しくなるほどあっさり下着を脱がされてしまっていた。

ずいぶんとワレメが目立つ。でも見た目は悪くない。ぴたりと閉じているし、色素沈着もないし。

そのワレメの中に男の指先が潜り込む。

クリトリスを探されるあたしは、相変わらずお尻を振って抵抗するだけ。

そんな動きじゃ全然駄目だ。男の手首を捕まえて引っぺがさなくちゃ。見ていてイライラするほどとろくさかった。

そして数秒後には指先に挟まれたピンク色の突起が露出していた。

クリトリスを揉まれ、太腿をヒクヒクさせるあたし。

あの時の感触がよみがえって、ワレメの内側で小陰唇がきゅっと縮んだ。

サンプル動画だから速いテンポで画面が切り替わっていく。

ワレメの下端部分から白っぽい液体が滲む様子。

耐えきれずに失禁してしまう様子。飛沫がカメラのレンズにかかった。

スカートの裾が揺れる度に、はだけられた乳房を揉まれる様子が見え隠れする。  
「うう……」

ツルンと剥けたクリトリスが大写しになった時、あたしは停止ボタンを押した。  
心臓が短距離走の後みたいにバクバクだ。

「こんな……こんな……」

ふらふらとベッドに倒れ込む。

「どうということなのよ……」

真佐美さんの輪姦動画があったサイトにあたしの痴漢動画がアップされたことは、ただの偶然の筈がない。つまり、最初からその目的で？ あたしに恥をかかせるために？

真佐美さんならやるだろう。

あたしはまんまと罠にかかって、期待通りに痴態を晒したのだ。そういう答えしか出てこない。

あの人にはもう関わらない方がいいのではないか。

さもないとこの次は……犯されるに違いない。弱気がよぎった。

「でも……」

強姦事件の報告が毎週のように上がってくるのに、風紀委員長の立場で黙殺を通せるはずもない。現状でも対応が遅すぎるくらいなのだ。

あたしは天井を見上げた。

もう手に負えない。顧問の先生に相談しよう。

本来は被害者だったはずの真佐美さんは、最悪のケース退学処分になるかもしれない。自業自得という言葉が浮かんだ。

襲われたにしても、他人を巻き込むことなんか考えなければよかったのだ。

「それしかないか……」

あたしは呟いた。

#### 四 山下先生

顧問の山下先生は確か採用二年目だから、二十五、六才のはずだ。

あまりおしゃれに気を遣わないタイプだけど美人な方だと思う。

とにかく胸が大きい。九十センチは余裕で超えているだろうし、もしかしたら三桁の大型に乗っているかもしれない。

一度ナマで拝見したいと思っっている男子生徒は掃いて捨てるほどいると思う。一年生の

時、林間学校のお風呂で見た事があるけど、見事なものだった。メロンほどもある乳房が、歩くだけで重たそうに揺れるのだ。あの乳房を揉んでみたい人は男女を問わず多いだろう。私だって機会があれば確かめてみたいものだ。

……まあ、胸のことはいい。

職員室に向いたあたしは、山下先生に一連の状況を説明した。

真佐美さんに誘われた女生徒が何人もJKクラブで輪姦されていること。黒幕は真佐美さんで間違いないこと。忠告しても埒があかないこと。

「JKクラブって、要はスナックやバーの類でしょ。お客さんの目の前で犯されるって事？」

山下先生は目を丸くしていた。

「現場を見たわけじゃないけど……恐らくは。少なくとも真佐美さんはそうでした。真佐美さんは、犯されているビデオを会員制サイトに公開されてしまったんです」

「そう……」

「奇妙なことに犯された女生徒が何人か、そのJKクラブに出入りしているという話を聞きました」

あたしは未確認ながら複数の情報が寄せられた案件も、先生の耳に入れておくことにし

た。

「自分の意思で？」

「はい。真佐美さんに強制されているわけじゃなさそうです。その……わざわざ自分から襲われに行ってるのでしょうか……」

「どうということなのかしらね」

山下先生は首をひねった。

「それと……あたし自身も、ええと」

あたしは口ごもった。

「真田さんまで輪姦されたの？」

呆れ顔で見られてしまった。

「いえ！あたしは……ち、痴漢されました。真佐美さんの尻に嵌められて……」

口にした瞬間に言わなければ良かったと思った。後悔先に立たず。さすがに痴漢中の姿をエロサイトに投稿されてしまったことは伏せておいたけど。

「あなたは風紀委員なのよ。それも委員長でしょ。そういう目に遭わないように注意するのは当然でしょう」

山下先生の口から出たのはお説教だった。

言っていることは分かる。だけど現実問題として、あの状況でどうやって逃げると言う

の。先生は女性器を弄くられて、それもクリトリスを狙われて平静でいられるんですか。あたしは喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

「そ、それは……いえ、すいません。あたしの不注意でした」  
取りあえず謝っておく。悔しかった。

「隙があるからそういう事をされる。肝に銘じなさい」

「はい。でも、もうあたしどうしたらいいか」

「……」

山下先生はしばらく考えて、「真田さんは動かなくていいわ。私に任せてちょうだい」と言った。

「分かりました」

先生なら何とかしてくれるだろう。力及ばずで丸投げになってしまったけど、肩の荷が下りた気がした。

いくら真佐美さんだって、先生が出てきたら大人しくするしかない筈だ。

しかし、一週間経っても二週間経っても、ひと月過ぎても山下先生から音沙汰はなかった。解決したのならそう言ってくれるはずと、心待ちにしていたんだけど。

解決したのならそう言ってくれるはずと、心待ちにしていたんだけど。

女生徒の被害報告は一定のペースで増え続けていたから、状況はまるで好転していない。

「説得中」「もう少し話をする必要がある」「こういう事は焦っても駄目」

それとなく訊いてみても、山下先生から返ってくるのは曖昧な返事だけだった。

本当に動いてくれているのだろうか。

ある時、二年の女生徒が三日続けて襲われるに至って、あたしは状況を説明してくれるよう強く迫った。

厄介ごとを押しつけた身で心苦しかったけど、もし先生の手に残るなら、別の方法を考えないといけない。

「……この件は放っておきましょう」

粘った末に山下先生の口から出た言葉にあたしは耳を疑った。

「はい？」

「もう関わるのをやめましょう。いいわね」

女生徒が犯され放題されても構わないということ？ そう言っているのと同じではないか。あたしは信じられなかった。

「ど、どういうことですか」

「そういう事よ。報告が上がってきても対応不要。ファイリングだけしておいて」

「そんな馬鹿なっ。みんなにどう説明したらいいんですかっ」  
 山下先生は辻褃の合わない言い訳を並べた末に、職員会議があるからと逃げてしまった。  
 「……」

変だ。いつもの毅然とした山下先生と違う。  
 あれは『やましいことのある』人間の目と態度だった。

真佐美さんと何かあったのでは？  
 もっとはつきり言ってしまうえば、真佐美さんの罠に嵌められたのではないか？ あたしと同じように。

あたしの『女の勘』がそう告げていた。  
 それが痴漢なのか強姦なのか知らないけど、その類いのことに違いない。真佐美さんならやりかねないと思った。

「……結局、あたしが真佐美さんとやり合わなくちゃならないのか」  
 あたしはため息をついた。

「山下先生もただのメスだったって事よ」  
 真佐美さんはあっさり認めたと認めた。

「オッパイ女は珍しくないけど、あれだけ立派なクリトリスの持ち主はそういないでしょ

うね。お客さんも大喜びだったわ」

口元を片方だけゆがめてうそぶく。  
 やっぱりやられていたんだ……

あたしは無力感に襲われた。

「そうそう。これ、真田さんに渡そうと思って用意しておいたのよ」

真佐美さんは鞆の中からDVDディスクを取り出して差し出した。機械的に受け取る。

「あなたも見たいでしょ」

「え？」

「分かっているくせに。山下先生の輪姦現場。ふふ、楽しんで」

楽しんでだっ？ 一体どういう性格しているのかしら。やっぱりねじけている。

「じゃね」

真佐美さんはクスリと笑って背中を向けた。

「待ってよ、ちよっと……」

どうしろって言うの、こんなDVDもらっても困る。内容が内容だけにその辺に捨てるわけにも行かないし。

いい処分方法を思いつかなかったの、あたしは取りあえずDVDを鞆に放り込んだ。  
 「……」

風紀委員長のあたしが痴漢されて、頼みの綱だった山下先生は輪姦されて。真佐美さんに言っても聞く耳なしで、事件報告だけがたまっていく。

あと出来ることと言えば、直接そのJKクラブの店長と話をするくらいか。危険だから、行くとすればあたし一人になるだろう。

「飛んで火に入る何とやらだわ。犯されて終わりに決まってる」

犯され姿をビデオに撮られて、エロサイトに晒されるのだ。痴漢された時のように。

「冗談じゃないわ」

あたしは馬鹿馬鹿しい思いつきを却下した。

——却下すると言うことは、何もしないと同じだ。だって、誰もこの件に関わってくれないのだから。気のせいかもしれないけど、最近は生徒たちの視線が冷たい気がする。

何時までそのままにしておくつもりなのかしら。何のための風紀委員なの。

多分気のせいだ。気のせいに決まってる。

でも風紀委員である以上、何もしないわけにはいかない。それも分かっている。

仕方ないので学校帰りにあたしは例のJKクラブに寄ってみた。正確には、近くをうろついてみただけ。一応、行動してみましたって自分に言い訳したかったのだと思う。だっ

て店の人たちに捕まったら輪姦されてしまうし。そんなの勘弁だし。

「あ、あの子は……」

行ったり来たりしながらぐずぐずしていると、JKクラブの裏口からうちの制服姿の女の子が出てきた。あたしの記憶では、被害が表沙汰になり始めた頃にここで輪姦された二年生だ。ファイルにレポートが上がっていたはず。

そして、その後も出入りを繰り返していると噂の子でもある。

上気して口が半開きの顔、ボタンを留め忘れてブラが見えているブラウス。

丁度風が吹いて短いスカートがまくれ、ナマのお尻が見えた。

下着を穿いていないなんて。間違いない、今まさに『何かされて』出てきたところだ。

あたしはしばらく、彼女の後を追って歩いた。

「ごめん、ちょっと話聞かせてもらっていい？」

繁華街の外れにさしかかったところで声をかける。

「はい？ ああ……風紀委員？」

彼女は緩慢に振り向いた。泣く子も黙るはずの風紀委員に怯むこともなく、トロンとした目つきを向けてくる。

「あなた、あの店に出入りしてるの？」

「たまにね」

あっさりと認めた。隠す気はないらしい。

「中何が行われているのか聞かせてもらっていいかな」

「自分で入って見ればあ？」

彼女は「うふふ」と笑った。

「……う、うちの女子生徒が何人もあそこで犯されているんだけど。知ってるよね」

「なんだ、分かっているじゃん。あたしもその一人だよ」

「ええと……どうして……」

「何？」

「ど、どうして出入りしようと思うの？ だってあそこで……ご、強姦されたんでしょ？」

「輪姦。初めての時は五人がかり」

女の子がまた「うふふ」と笑う。

「そうねえ……あたしの中にはもう一人のあたしがいるって分かったの。エッチなことをされたくてされたくてたまらないもう一人のあたし」

「……」

何となく言いたいことは分かる。あたしも女だし。痴漢された時のことを思い出してオナニーしてしまうことだってある。

「不思議よねえ、あんなに悲鳴上げて抵抗してたのに、いつの間にか意識飛んでイキまくり。あたしのお股に付いているマンコのせい。この子ヤバいの。あたしがあたしじゃなくなっちゃうんだもん。うふふっ」

女がそうなるのは、きつとクリトリスを狙われたのだろう。それしかあり得ない。

五人がかりじゃどんなに抵抗したところで無駄だ。女の方じゃ為す術もなくクリ豆を掘り起こされて騷られ放題。

あたしもやられたから分かる。クリトリスを騷られたら、女の子は『イク』。本人の意思とは関係なく。捕まった女の子は、相手がやめるまでイキ続けるしかないのだ。

「一度体験してみたらいいじゃん。マジで。風紀委員長さんにそんな勇氣はないだろうけど」

「そ、それは……」

見下した物言いにムカついた。喉まで出かかった「あたしだって痴漢にイカされたことくらいある」って言葉を飲み込む。やられ自慢なんて、馬鹿馬鹿しいにも程がある。

「お客さんの前で思い切り叫びながら気持ちよくしてもらえて。我に返れば『可愛かったよ』『色っぽかったよ』って褒めてもらえる。おまけに出演料までもらえる。最高じゃん？」

「だけど痛かったりしないの？ その、犯されるんでしょ」

「うくん、正直いつ犯されたのか記憶にないって感じ。その前に発狂寸前までイカされちゃうから。裸を見られるとか、マンコ開かれてるとか、ホントどうでも良くなっちゃうんだよね。だから犯られる時は穴なんかお汁まみれ。あんた、ずいぶん興味あるんだね」  
 あたしは彼女の「ずいぶん興味あるんだね」という言葉にどぎまぎしてしまった。被害者のナマの声を聞いて参考にしたいだけで他意はない。

今の話で彼女がクリトリスを弄られてイカされたことがはっきりした。『その前に発狂寸前までイカされる』ってことはそれしかあり得ない。

「あ、あたしはただ風紀委員としての職務上……」

「ま、別にいいけどさ。一度体験してみたら考え変わると思うけど？ 女だったらね」

「そんなはずないわ」

あたしは否定した。考えが変わるってどういうこと？ あたしが輪姦の虜になるって言いたいのか？ あり得ない話だ。

「そう固く考えずにやってみたらいいじゃん。何事も経験だよ。悶絶するまでマンコを弄られたら、絶対にやみつきになるからさ」

「……」

根本的に考えがずれている。話をするだけ無駄だろう。

「と、ともかく、ああいう店に出入りするのは良くないんじゃないかしら」

言ってみたものの、自分でもまるで説得力がないと思った。

「はいはい。考えとくわ」

彼女は「ふっ」と笑って背中を向けた。

「……」

ひらひら揺れるスカートを見送りながら、あたしは複雑な気持ちだった。

分かったのは、出入りしている本人はちっとも困っていないこと。騒いでいるのはまだ襲われていない女生徒たちと風紀委員だけ。

「本当に放っておいていいんじゃないかしら？」

そんな気がした。騒いでいる子たちは、誘いに乗りさえしなければ安泰なのだ。

山下先生だって放っておきなさいと言っているんだし、そうしたって全然問題ない。

—— まあ、山下先生は輪姦されてあちら側に『堕ちちゃった』からそう言うんだろうけど。

「輪姦……と言うよりも徹底的にイカされて狂わされるんだ……。そして自分の中のメスに火が付いて抜けられなくなる」

お堅いはずだった山下先生が堕ちるくらいだから、徹底的にイカされてしまったのだから。あの二年生の女生徒みたいに。

「もう少し様子見でいいかな」  
 そうしよう。あたし一人で空回りしたって仕方ない。

数日後、一人で風紀委員会の部室に残ってたまった書類をまとめてみると、山下先生が様子を見に入ってきた。あちらから自発的にやって来たのは久しぶりだ。

「どんな感じ？」

「相変わらずです。例のJKクラブに関する被害届もたまる一方ですね」

あたしは皮肉を込めて答えた。

「そう」

山下先生は顔色一つ変えなかった。あたしの前の席に座って資料をばらばらめくって目を通し始める。

「確かに多いわね」

その口調は他人事だった。学校側の責任者だというのに。犯された女ってこんなに変わるものなのだろうか。

「あの……本当に放置でいいんでしょうか」

あたしは話を蒸し返した。

「いいわ。何もしなくても」

山下先生が平然と答える。

「……」

議論の余地はない。引き結んだ口元がそう語っていた。

「分かりました」

もうこの人は当てにならない。あたしも黙った。

やる気がないなら邪魔だから出て行って欲しい。そう思った。

「痴漢の被害も増えているのねえ。あの路線はどうしようもないのかな」

しばらくして山下先生が呟いた。

痴漢……。あたしは聞こえないふりをした。

「真田さんも災難だったわねえ。あれじゃ逃げようがないものね」

「は？」

何、その見ていたような言い方。あたしは反応に困った。

確かに最初に相談した時、あたしも真佐美さんの畏にかかって痴漢の被害に遭ったことを口にした。でも具体的なことまで話していない。

逃げようがない——全くその通り。弄られて、弄られて、弄られて、あたしは無様にもイカされてしまったのだから。

「ふふっ。ま、いいわ」

山下先生が笑ってあたしの身体を無遠慮に眺めた。頭から足先まで。一部の男子にありがちな、制服の下の裸を探るような嫌らしい目。あたしは不快感を苦勞して押さえなければならなかった。

「女に目覚める年頃だもの、ああなるのも仕方ないと思うわよ」

「何を言いたいのか知りませんが、こっちは忙しいんです。用がないなら……あつ」  
腹が立って嫌味の一つも言ってるやろうと思った瞬間、あたしは思い出した。真佐美さんの輪姦ビデオがエロサイトにアップされていると報告したことを。

もし……もし、山下先生があのエロサイトを見に行っていたら。いや、見ていないはずがない。だってこの先生は犯されてあちら側に堕ちてしまった女なのだ。

あの会員制サイトには、あたしが痴漢されている現場ビデオがある。先生なら数千円の会費くらい払えるだろう。

あたしを知っている人なら、たとえ目線処理してあっても、痴漢されている女生徒が誰なのか気付くと思う。同性なら尚更だ。

見られた。

あたしはやつと山下先生の笑いの意味に気付いた。

『ああなるのも仕方ない』——その言葉が全てを物語っていた。

山下先生は痴漢にマンコを弄られてイカされるあたしの痴態を見たのだ。

真下から撮影された剥き出しのマンコも、ワレメの中からクリトリスを掘り出されるところも、そのクリトリスを弄られて失禁してしまうところも、とうとう我慢出来ずにイッてしまったところも、膣穴からだらしなくお汁を垂らしたところも全部。

「し、失礼しますっ！」

いたたまれずに部屋を飛び出した。混乱したまま廊下を走る。

すれ違った生徒たちが何事かと脇によけた。

規則では廊下を走ってはいけないんだけど、それどころじゃなかった。

その一週間後、山下先生の授業の時だった。前半にミニテストがあって、山下先生が軽い足音を立ててみんなの机の間を行ったり来たりしていた。

あれ以来、山下先生は部室に顔を出していない。あたしは平静を装っていたけど、気まぐずくて先生とは目を合わせないようにしていた。

答案用紙を埋めてぼんやりとしていたあたしは、前の席の男子がスマホを山下先生のスカートの下に入れてシャッターを切るところを見てしまった。

この手の盗撮は日常茶飯事で、大抵の女生徒は一度は自分でも気付かない間にやられて

いるはずだ。男子はもちろん、女子同士でもふざけてスカートの中を撮ってからかったりしている。

本来ならとちめてやるところだけど、あたしの心に浮かんたのは「山下先生ならスカートの中を撮られるくらいどうってことないでしょ」だった。

あたしの中で、山下先生は敵として認識されている。ま、いつか。あたしは関知しないことにした。

大人の色気漂う山下先生の下半身だ。さぞかし素敵写真が撮れたことだろう。そして授業が終わった休み時間、男子たちが教室の隅でどよめいていた。

「うはっ、ノーパンだぜ」

「マン毛生えてないってどういうことだよ」

うそ……あの先生、下着も穿かずに教壇に立っていたの!?! どれだけ闇堕ちしたんだろう。

馬鹿な女。そのマンコの写真、あつという間にみんなに転送されて広まってしまふのに。輪姦された女ってそんなもの？あたしは呆れてしまった。

だけど「生えてない」のはおかしい。林間学校のお風呂で見た記憶では、普通に生えていたはず。

J Kクラブで無理矢理剃られちゃったのでは？ それしかない気がした。

一体この先生、どんな輪姦まわされ方したのかしら。

「そうだ、真佐美さんにもらったDVD……」

あたしは鞆の中に放り込んだままだったことを思い出した。

見てみたい。そう思った。

あつちがあたしの痴漢動画を見たんだから、こっちにだって見る権利はあるだろう。

家に帰って自室にこもると、あたしはDVDをセットした。もちろん音声はヘッドホンだ。

真佐美さんの時と同じく、ちよつと薄暗い店内。その片隅に人だかりが出来ていて、暴れる女性の足先が見え隠れする場面から始まった。

「何するのっ 嫌あああつ」

思った通り金切り声の悲鳴だった。間違いなく山下先生の声だ。めちゃくちゃ焦っている感じ。

「ひやああああつ」

「押さえろ、押さえろ」

激しく抵抗する脚がちらちら見える。見覚えのあるスカートの柄も確認できた。

取り囲んだ人垣の真ん中には裸に剥かれている最中の女体。これだけの人数に囲まれてしまったら、まず逃げられないだろう。

何だかゾクゾクした。

「ひいっ、やめなさいっ！」

何をされているのか確認したくても人垣が邪魔だった。特に手前の太った男。こいつが視界不良の元凶だ。

やがて、足先に絡まった白い布きれがひらひら揺れ始めた。山下先生、下着を脱がされてしまったみたい。

画面がぶれるのははっきりしないけど、下着だけじゃなくてストッキングの残骸と合わさったものようだ。

それにしても人だかりの背中ばかり見せられてストレスがたまる映像だった。その内側でされていることが見たいのに。

カメラが少し寄って男の脇の隙間から中を撮影しようと試みた。

「ひいひいひいっ！」

目をこらしていると、チラリと白い肌と黒い影が見えて、また男の背中に隠れてしまった。

どうせならちゃんと見せてよ。あたしはリモコンを持って一時停止させ、スロー再生し

てみた。

「なるほどね……」

思った通りだ。

一瞬見えたのはスカートを捲り上げられた腰部で、黒い影は山下先生の恥毛。林間学校のお風呂で見た記憶と一致する生え方だった。密度は普通で、ワレメの中心線に沿ってもやっとなりが続いている感じだ。

男の手が下着にかかっており、正にマンコを露出させられた瞬間を捉えていた。

DVDのカウンターを見ると十八秒しか経っていない。

襲われた真佐美さんもそうだったけど、女なんていとも簡単に裸に筆られてしまうものなのだ。あたしだって痴漢された時は「どうしよう、どうしよう」と焦っている間に下着を降ろされていたし。

「……やっぱり生えてる」

昼間男子たちが騒いでいたけど、この時点で山下先生はちゃんと恥毛が生えていた。

やがて手前の太った男が動いてくれたので、内側がはっきりと見えるようになった。大変有り難い。

「嫌あああっ！」

スカートを腰の上まで捲られた、下半身裸の女体。

下着を脱がされた山下先生、メチャメチャ抵抗してる。まさに必死という感じ。そりゃそうだ、あたしだっていきなり襲いかかられたらパニックに陥って暴れまくるだろう。

手足はそれぞれに押さえられていて、黒い恥毛が忙しく上下にぶれる。太腿に絡まるストッキングの残骸がエロかった。

ブラウスの下では、ポリウレーム感あふれる盛り上がり重たそうに揺れ動いていた。先生のトレードマークの巨乳だ。多分、暴れたせいでブラジャーからこぼれてしまっているのだろう。乳首のぼつちがかすかに透けて見える。

下では先生の両脚を開かせようとしているようだ。斜め横からの映像でも、足が大きく広がっていく様子が確認できた。

きつと足元にいる男たちは、いい眺めに違いない。

「やめてえええっ！」

先生の上半身側から手が伸びて、ブラウスのボタンを外し始めた。しかもうちの制服姿の女の腕。顔は映っていないけど、あの肌の感じはおそらく真佐美さんだ。

ブラウスの内側から大きな大きな膨らみが姿を見せる。左右それぞれに意思を持った軟体生物が、揺れ動きながら外に出たがっているよう。

「やっぱり」

思わず笑ってしまった。思った通り、山下先生のメロンサイズの乳房は両方ともブラジャーから飛び出していた。

色合いの薄いくつきりとした大きな乳輪に対して、乳首は標準サイズだった。

山下先生の乳房は歩くだけで揺れる。その大きな乳房が波打つように上下左右に揺れ動いている。

「そこは嫌っ！ あああっ！」

焦ってもがく女体が見え隠れしていた。

股間に手が伸びて、何かしているようだ。

ムッチリとした太腿に力が入ってピクピクしているが、何本もの腕に押さえられて抵抗しようとしても動けない。

「キイツ！ 嫌ああああっ！ あああっ！」

それでも山下先生は必死の抵抗だった。

腰の部分が何度もガクガクと上下にぶれる。

「いひいひいっ！」

股間に伸びた指先が忙しく何かしていた。

時々下卑た笑い声上がる。

はつきりと確認出来ないけど、女のこの悲鳴と反応。あたしはクリトリスを剥かれているんだろうと思った。「きいいいいっ！ きいいいいっ！ きいいいいっ！」

そんな中で、山下先生が金切り声を上げてそれまでの倍も腰を高く突き上げながら、太腿を震わせた。

股間で動いていた指先が、「ここを見て」とばかりに一点を指差す。指差す先は丁度ワレメの真ん中か、ちよつと上あたりの位置だ。

画面が天井カメラに切り替わって、襲われ中の山下先生の全身が初めて明らかになった。先生は思ったよりも足を大きく広げられていた。婦人科の診察台に乗せられたくらいを感じ。

ワレメが弾けて開き、恥毛越しに飛び出たクリトリス龟头が映っている。あたしは真佐美さんの「あけだけのクリトリスの持ち主は珍しい」という言葉を思い出した。

山下先生はクリトリス器官が大きい事は確かだ。自分と比べても、サヤが『太い』のだ。倍以上ある。

上からの映像では小陰唇は見えなかった。

多分、足元にいる男たちからは小陰唇どころか尿道口と膣穴まで見えているんじゃないかな。要するにワレメの中に収まっているモノ全部。

乳揺れがすぐ目立つ。

「アヒイイイッ！」

先生の上半身側に陣取っている制服姿の女は、やはり真佐美さんだった。その真佐美さんの前で、悲鳴を張り上げて顔を歪ませる山下先生。

女教師が教え子の前であんな顔して恥ずかしくないの。一瞬そう思った。

「あああああっ！」

真佐美さんに巨乳を捏ね回される山下先生。悔しがって身体をひねっているけど押さえつけられてどうにもならない。

抗う術もなく乳房を揉まれ、乳首を摘ままれ、タプタプ揺らされて笑われる。かなり哀れな状態だ。

足元側の人だかりを押しつけて、別のカメラ担当が足の間に入る様子が映った。直後、画面がドアップのマンコに切り替わる。

「うわあ……」

つい声を出してしまった。いきなり鼻先に他人の女性器を突きつけられたようなもので、さすがに引く。でもあたしは目を逸らさなかった。

見てやるんだ。見られたんだから見てやる。

弾けて中身を全部晒した陰裂。本当に何もかも丸見えだ。なるほど、男の人たちはこの

状態を見ていたわけか。

女性器の向こう側に、真佐美さんに揉み回される乳房がしっかり映っているのがご愛嬌だった。山下先生もワレメの中身を晒していることを自覚しているらしく、恥部を隠そうとあがいていた。もちろんそれは無駄な努力なただけ。乳房の隣に開いたり閉じたりの手のひらが映っている。

クリトリス丸剥け。丸々とツヤのいいクリトリス亀頭が露出して起立している。さっきの焦った反応は、まさにクリトリスを剥かれる時のものだったのだ。

ビクンと身体を仰け反らせたのが、抵抗空しくクリトリスを剥き上げられた瞬間。

左右対称で肉付きのいい大陰唇が楕円形に口を開けていた。小陰唇の形も左右対称。皺が少なくてぼつてりとして印象だ。色はあまり使い込んでいない感じで薄め。

恥毛は薄くはないけど生えている範囲が狭いと思う。ワレメのI字に沿って上の方に延びていて、横方向の拡がりが少ない。それでもあたしよりは生えていた。

全体的に余分な髪が少なく、パーツごとの境目がはっきりした女性器官だった。ここからここまでが小陰唇、ここからはクリトリス器官。そんな感じ。

小陰唇が輪のように盛り上がり、膣前庭部もすっかり見えていた。尿道口も膣穴も丸見えだ。貫通済みかどうか…それは見ただけじゃ判断できないけど、すぐに明らかになるだろう。

クリトリスは真佐美さんの言葉通り、キングサイズ。あたしの数倍はありそうだった。

「ひいひいひいっ！」

剥き出しのマンコに向かっていくつものスマホが向けられ、何度もシャッターを切っていた。身体全体がすっぽり入るくらいのライトで照らされているから、さぞかし写りもいいことだろう。

「先生のくせにマンコ晒されちゃって」

意地の悪いつぶやきが出てしまった。

脇から男の指が伸びて膣穴に挿入された。最初は一本、続いて二本。それから穴の周りにローションが塗りたいくらいで電動バイブが突き刺された。深々と根元まで。

山下先生はヒイヒイ叫ぶけど、どうすることも出来ない。

男がスイッチを入れると、ピンク色をした筒状の物体がクネクネと卑猥に動き始めた。バイブには『熊ん子』と呼ばれるクリトリスを刺激するための突起が付いており、男がその先端を先生のクリトリスの根元にあてがった。

「アヒイヒイッ！」

膣穴に異物を咥えさせられてもがく先生の身体を、男たちが押さえつけた。

蠕動する異物に膣内を掻き回される山下先生。

この反応は恐らくバイブ本体よりも、クリトリスを刺激する『熊ん子』のせい。だって、クリトリスが押し上げられて起立しているし。完全に根元にハマっている感じだ。いきなりあんなモノにクリトリスを刺激されたら、暴れるに決まっている。失禁してしまっても仕方ないところだ。

そして、女は穴に入れられた異物を自力で排出できない。そのことがよく分かる眺めだった。

バイブを押しさえていた男が手を離しても、突き刺さったバイブはそのまま。どんなに悲鳴を上げようと、どんなに腰を振り立てようと、太腿に筋が浮かぶほど力を込めようと、抜ける気配はなかった。

意に反してこんなものを突っ込まれるのだから、強姦の一種だろう。

バイブを排出しようとする無駄にもがく山下先生を、男たちと真佐美さんが笑って見ている。

山下先生の恥丘部分にシェービングクリームが塗りたくられた。連中は先生の穴に電動バイブを突っ込んだまま、恥毛を剃り上げるつもりらしい。

いきなり裸に毛が剃られて公開でマンコの毛を剃られる。女としては相当に屈辱的だ。

普通なら、女性が恥毛を剃られるのは出産時と盲腸などの手術前くらいだと思う。こんな体験をする女性は滅多にいないだろう。

ジョリジョリ。ジョリジョリ。

シェーバーが巧みに先生の恥毛を剃り落としていく。膣穴部分から始まって上の方向へ。派手な指輪をした男の手が忙しく動く。

この人、一体何人の女をツルツルに剃り上げてきたのだろう。先生がもがいても、まるで動じない。

先生の大きなクリトリス亀頭が、電動バイブの振動でぶれて見えた。それだけ『熊ん子』がガッチリとクリトリスを捉えているという事だ。

女の指先 —— 真佐美さんに違いない —— が伸びて、クリトリス根元あたりの三角フードを丁寧にめくり上げた。

わずかな間に、ただでさえ大粒で目立つ先生のクリトリスが、さらに膨らみかけていた。剥かれたクリトリスがワレメの中央で大きく盛り上がり、接続する二枚の小陰唇も引っ張られて持ち上がって見えた。その小陰唇のクリトリスに近いあたりも、振動に巻き込まれてぶれているのだった。

「ひいひいひいっ！ ひいひいひいっ！」

すごい悲鳴だ。山下先生、恐らく『熊ん子』に気を取られてマン毛を剃られている自覚がないのでは。

尿道口から短くシュツと小水が飛ぶ。

山下先生の陰裂の下半分を剃り上げるのに要したのは一分ほどだった。タオルで付着した恥毛の残骸が拭かれると、ツルンとした皮膚が露わになった。遮る物なしの女性器官は、まさに『ナマモノ』。生々しくそして卑猥だ。

続いて男の指が陰裂の上半分を拡げて皺を伸ばし、恥毛が密集した部分を素早く綺麗にしていく。そこは『ヘリ』さえしつかり伸ばせば中にはクリトリスのサヤシかないから、剃るのは簡単。恥丘部分は言うに及ばない。

「あああああつ！ ひいいいいつ！」

山下先生は暴れ通しだ。仰向けで股をこじ開けられた体勢のまま動けず、体幹部分がガクガク揺れながら抵抗し続ける。もちろんクリトリスに密着した『熊ん子』は外れない。シュツ、ピュツ。小刻みに尿道口から小水が飛んでいた。

失禁しながら恥毛を剃られる女教師。

このビデオをスカートの中を盗撮していた男子たちに見せてやったら、何人かは射精してしまいうんじやないか。そんな気がした。

「嫌あああつ！」

八割方恥毛を剃り落とされたマンコの向こうで、真佐美さんが乳房にイタズラしている様子が映っていた。揉んで捏ねて乳首を摘まんて。

パイプに反応したのか真佐美さんに摘ままれたせいなのか、先生の乳首は両方ともぶつくりと膨らんでいた。乳暈が盛り上がり乳首がピーンと立った様子は、ほ乳瓶を連想させる眺めだった。

「あああつ！ あああつ！ ひいいいいつ！」

普段偉そうにしている山下先生の惨めな姿を目の当たりに、あたしも無意識に太腿が動いてしまっていた。無理矢理クリトリスを弄られる感覚を身体が覚えていて、マンコが熱くなってくるのを止められない。

襲われる同性の姿に興奮しているってどういうことだろう。あたしはこう、いうのが好きなのだろうか。不思議な気がした。

あたしも真佐美さんや二年生の女生徒と、本質的に同じなのだろうか。

「分かんない……」

ほとんどツルツルにされた山下先生の女性器を見つめながら、自分で自分が分からなかった。

あたしだって女だし、襲われたら同じような姿になるのに。

いや、山下先生が痴漢されるあたしの動画を見て楽しんだように、こっちにも見る権利がある。だから意味合いとしては仕返し。

あたしは自分を納得させて、山下先生のマンコの中身を皺一つまで記憶に焼き付けるつもりで凝視した。

大の字に押しえつけられた山下先生は諦めずに抵抗を続けている。ヒイヒイ叫んで何度も何度も腰を突き上げ、乳房をタップンタップンに踊らせて。

「ひいっ！ ひいっ！ ああああはあああっ！」

山下先生、こんなはしたない悲鳴を上げちゃうんだ。悲鳴顔を真佐美さんに見下ろされていてすごく惨め。

膣穴に突っ込まれたバイブが効いていることは明らかだった。だってクリトリスがぶつくり膨らんでワレメから飛び出ているし、ずっと振動でぶれっぱなし。

「ひあっ！ くひいひいっ！」

イキそうなんだろうな。お気の毒。

多分我慢しきれないだろう。あたしだって同じことをされたら我慢できない。クリトリスがぶれるほどバイブを当てられたらひとたまりもないと思う。

「ああああはあああっ！」

ひとときわ高い悲鳴と共に、山下先生のツルツルマンコからオシッコが噴き出した。プシヤーツと音を立ててすごい量の小水が放物線を描いて飛ぶ。

もちろん押しえつけられたままだから、みんなに観察される中での大失禁。大きな乳房をタップンタップンに踊らせながら、山下先生は半狂乱だった。

「抜いてええええっ！」

ツルツルに剃り上げられて具が丸見えのマンコがいやらしかった。まさに『女』って感じで。

ズッポリ挿入されたバイブの根元に、しっかりと小陰唇が絡み付いて啞え込んでいる。そして膣穴の下端には白っぽい液体のぬめり。

「ああっ、ああっ、抜いてええええっ！」

先生と言ったって所詮はただの女。こんなことされてるのに、マンコ濡らしちゃって。思わず意地の悪い笑みが浮かんでしまう。

膀胱が空になるまで失禁して尿道口が開いてしまっているのに、バイブは入れられたままだしクリトリスもぶれたまま。

山下先生はどこまで我慢できるだろう。たぶんイクのは時間の問題だ。絶対に我慢なんか出来っこない。

手足を押しえつけられた女体が、何度も腰を突き上げて仰け反っては身体をローリングさせる。

「くきいひいっ！」

カメラがバイブを啞えさせられたマンコを正面からアップで捉えた。

ツルツルに剃られた恥部の様子が、あらゆる角度から暴かれる。

大きなクリトリス亀頭が艶光りして膨らみ、ワレメから盛り上がりつつ天井を向いていた。  
「あひええええっ！」

泡を吹いて悲鳴を張り上げる山下先生。  
顎のすぐ下には猛烈に揺れ動く乳房。揉まれていないと言うことは、この乳揺れ姿も含めて晒し者にされているのだ。

真佐美さんも初輪姦ではすごい勢いで乳房を揺らしていたけど、比較にならなかつた。悔しいけど、あたしには真似出来ない。

「あはああああっ！」

突然、絶叫しつつ大きく仰け反った先生の腰がストンと落ちた。ぱっと肌に桜色が差す。周囲から歓声と拍手が起こった。

「くひいひいっ！」

その拍手も鳴り止まぬうちから、先生が立て続けに腰を突き上げる。

だってパイプのスイッチが入ったままだし、クリトリスもぶれたまま。

「イッてる、イッてる」

真佐美さんの手が伸びて、『熊ん子』が正確にクリトリス亀頭の真下に当たるように調節する。

カメラが臍穴に寄ると、充滿したお汁が溢れかけていた。

泡立つ白っぽい液体が臍穴から肛門にかけて、べっとり付着している。

揺れまくりの乳房もまた明らかに湿っていた。先生がイッたと同時に乳汁を噴いたのだ。

「ひいひいひいっ！ あひいひいひいっ！」

押さえつけられたままだから、先生はイキッぱ状態だった。

一番効いているのはクリトリスに当たった『熊ん子』であることは明らかだ。

あたしだって同じことをされたら我慢出来ないと思う。

「……」

気がつくときあたしは下着を脱ぎ捨てていた。

指先を陰裂に差し入れて、クリトリスの周囲を押すように刺激する。

それだけじゃ満足出来ず、ベッドに仰向けになってスカートを捲り上げ、大きく脚を開いた。山下先生に負けないよう、股間が軋むほどの大股開き。

そしてモニター画面に向かって自分のマンコを掻き拵げ、包皮の中からクリトリスを掘り出した。

ああ、気持ちいい。こうしていると自分まで暴行されている気分だ。

「キィィィッ！」

金切り声に目をやると、山下先生がクリトリスを弄くられていた。

手を伸ばしているのは真佐美さんを含めて三人くらい。  
生クリトリスを摘まんで揉んでつついてイキっぱ状態に固定してしまう。先生がヨダレを垂らそうが乳汁を撒こうがお構いなしだ。

「くきいいいっ！」

開きっぱなしの尿道口がパクパク動いていた。

「あああっ！」

山下先生の『惨状』を見ながら、あたしもはしたない声を上げてイッてしまった。我慢出来なかった。

誰かあたしをpushさえてイタズラして欲しい。気が変になりそうな感覚に丸呑みされ、イッてるのにクリトリスを弄り続ける。山下先生と同じようにされたかった。

先生が暴行されている限り、あたしも指を止めない。そうすれば先生が味わっている快感を体験することが出来る。そう思ってあたしは夢中でオナニーを続けた。こんな事、痴漢にイカされた後だってしなかったのに。

途中で意識がふっと遠のいた。軽く失神してしまったみたい。

そして画面を見ると、山下先生はまだクリトリスを弄られて絶叫していた。

膣穴が濡れてトロトロだったので、ティッシュで何度も拭かないとシートを汚してしまっていた。でもいくら拭いてもあたしの穴からは止めどなくお汁が溢れ出してくる。

山下先生も同じだった。穴の位置が分からないくらいにお汁を垂らして悶え狂っている。シャツにシミが浮いているのを見つけてしまったと乳房をはだけると、しっかりと乳汁が滲んでいた。ピーンと乳首が硬く尖って脈打っている。

「はあっ、はああっ」

山下先生が男たちに犯され始めた。

あたしも対抗して膣穴にズッポリ指を突っ込んで掻き回す。

ヌチャッ、クチュッ。嫌らしい音が響いた。

山下先生が犯されているので、あたしもイッても指を止めない。

どんなにお汁が飛び散ろうと、意識が遠のきそうになると抜き差しを続ける。輪姦される女は相手がやめるまで逃れられないんだから、あたしもそうすべきだ。

「ヒイツ、ヒイツ、ヒイツ」

先生の悲鳴なのかよがり声なのか分からない声が耳につく。いつしかあたしも、ヒイヒイと声を上げていた。

どうして襲われる女って「ひいっ」て言うんだろう。よく分からないけど、気持ちと肉体の状態を言葉にするのに、それ以上にびつたりの表現を思い付かない。

「ヒイツ、ヒイツ、ヒイツ」

「ひいっ、ひいっ、ひいっ」

山下先生の声とあたしの声がハモる。  
 ああ、もう体力の限界だ。あたしの方が若いのにな。  
 壁の鏡に目をやると、大股広げた女が夢中でマンコ穴を掻き回して仰け反っていた。  
 どうやらあたしの負けっぼい。山下先生はまだ犯され中なのに。  
 そして気が遠のいていく。

以来、あたしは山下先生にからかわれても気にならなくなった。

あつちは優位に立っているつもりらしいけど、とんでもない。あたしの瞼の裏には、先生の女性器がドアップで浮かんでいるのだ。

押さえつけられてクリトリス弄られちゃったくせに。イキながらお乳噴いていたくせに。これがヒイヒイ叫びながらマンコの毛を剃り上げられた女の顔。

あたしはついニヤついてしまいそうになるのを押さえなければならなかった。

それでも風紀委員員の活動報告があるから、表面上だけでもうまく付き合っていく必要があった。風紀委員長と顧問の先生という関係は変わらない。

週一の報告を上げに職員室に向かった時のことだ。その日は会議が長引いて、閉門ギリ

ギリの時間だった。

職員室のドアに手をかけた時、あたしは山下先生と真佐美さんが話をしているのを見つけた。

正しくは座った山下先生の後ろに真佐美さんが立って、ブラウスの胸元に手を突っ込んで乳房を揉み回していた。

床に書類が散らばっている。多分、仕事中に後ろから不意を突かれたのだろう。

どれだけ抵抗したのか知らないけど、山下先生は目をとんとさせて大人しく乳房を揉み放題されていた。

馬鹿ねえ、輪姦されちゃって。真佐美さんのささやきに山下先生がかぶりを振る。

あたしのクラスの子が見てたんだけど。現場のスマホも撮ってるんだけど。真佐美さんがスマホを操作して画面を先生の目の前に突きつけた。

ほうら、これなんか先生のツルマンくつきりだよ。山下先生は目を見開いて画面を見つめ、「だって」と言い訳した。

用具室って超危ない場所だって知ってるでしょ。ちゃんと抵抗したの？ 山下先生が頷く。

悲鳴上げた？ また頷く。

どうやら山下先生、あたしの知らないところで輪姦の被害に遭ったらしい。

真佐美さんが言うように、用具室の類いは女の子が襲われる危険が高い場所だ。輪姦事件はもちろんあるけど、一番ポピュラーなのはカイボー。捕まったら最後、まず逃げることは不可能。

抵抗空しく裸に筆られ、マンコを拡げられて弄られる運命にある。

体育用具室、理科準備室、空き教室。風紀委員会に集まった情報から逆算すると、女の子の三人に一人は在学中にそこでマンコを提供させられるはずだ。教育実習生に至っては、七割の確率で襲われてしまう。

ねえ、イッた？ 山下先生は一呼吸置いて首を縦に振った。「だって」とまた言い訳を始める。

そっかあ、ワレメの中身をバキュームされてクリトリスを吸い出されたんだ。真佐美さんがクスクス笑い、服の下で乳首を転がされる山下先生がピクピク反応した。

クリトリスは先生の弱点だから、死守しないと駄目でしょ。

「だって下着を降ろされてすぐにマンコに吸い付かれてしまっ……ワレメの中身の柔らかいところ、全部吸い出されてしゃぶられて気が変になって……」

小陰唇を吸い出されたんだ。アレは効くよね、もがいても小陰唇って伸びるばかりで逃れられないし。

じゃあ、クリトリスをチュウチュウ吸われちゃったのかな？

山下先生が赤くなって頷いた。

この先生、生徒にクリトリスを吸われたんだ。あたしの脳裏でDVDが再生される。でもまあ分かる。複数人に押さえつけられたら、女としてはどうしようもないのだ。あたしだって同じ状況になれば、無事ではいられないだろう。

うんうん、分かるよ。私も経験者だから。真佐美さんが先生の耳元で慰めてやっていた。調子に乗ってブラウスの前を拡げてブラの中から巨乳を搔き出して拡げ、餅みたいに捏ね回す。

先生は胸を突き出して乳房を捏ねられて鼻声を出していた。

あたしは先生の両乳首が乳汁で白く湿っていることに気付いた。

あれじゃ膣穴も濡れてトロトロだろう。

輪姦されたいよね？

真佐美さんの囁きに先生が何度も頷いた。

じゃあ今日は十九時過ぎまでに店に来て。

山下先生は、嫌々ではなくて待ちきれない様子だった。

だってハアハア言いながら脚が開いちゃってるし。もっと捏ねるとばかりに胸を反らせているし。

そこまで覗いて、あたしは報告を諦めて踵を返した。明日にでもまた来ればいい。

レイプ 落ちた女が二人。この状況で下手に声なんかかけたら、誰もいないのをいいことに押さえつけられて裸にされかねない。

二人には痴漢ビデオを見られているけど、生マンコを提供するつもりなんか毛頭なかった。

家に戻ってからも、あたしはずっとレイプについて考えていた。女ってのはそういう生き物なのかも。

強烈な快感を身体が覚えてしまつて、決して忘れてくれない。無理矢理だろうと関係ない。イツてしまったことは事実なんだから。

昨日のオナニーの後だって、あたしが気を失つてからも山下先生はクリトリスを弄られ通しだったのだ。

発狂寸前までクリトリスを弄られ続けた女が落ちるのも頷ける。そう思った。

真佐美さんも同じことをされて落ちたはずだ。見たのがサンプル動画だから分からないだけで、会員のフルサイズビデオ版には徹底的にクリトリスを弄られる真佐美さんの『惨状』が記録されている可能性が高い。

もしあたしだったらどうなっただろう。押さえつけられて、延々とクリトリスを弄られるあたし。イツてもイツてもクリトリスを弄られてしまつたら……。

オシッコを漏らしても乳汁を噴いても、解放してもらえないあたし。

想像しただけでワレメの内側が熱くなつてクリトリスが膨らみ始める。

どうして？ 答えは簡単だ。痴漢に弄られた時の快感を身体が覚えているから。だから、理性とは関係なく反応してしまうのだ。

「落ちない……自信はないかな」

あたしは呟いた。

昼間は真面目な風紀委員長。その正体は放課後になると刺激を求めてJKクラブに通い詰めるレイプ 落ち女。

ありうる。充分にありうる。あたしは苦笑いするしかなかった。

「輪姦かあ……」

時計を見ると二十時過ぎだった。

今頃、山下先生は襲われている真っ最中だろう。そう思うとまたお股がムズムズした。「またあの大っきなクリ豆弄られて、お乳振り乱してるのかな」

脳内で勝手にDVDの再生が始まる。

きつと本人はお汁まみれでヒイヒイ叫んでいるに違いない。

昼間は校内で輪姦。夜にもJKクラブで輪姦。輪姦漬けで充実した一日……。

「あれ？」

何だか面白くない。あたしは自分の嫉妬にも似た気持ちに気付いて戸惑った。

あたしの方が若くてピチピチの女子高生なのに。

あたしだってマンコ開かれて包皮をめぐられたら、ピンク色のクリトリスが出るんだから。

「……なんか変」

寄ってたかつてヒン剥きかけられるのってどんな気持ちなんだろう。って言うか、自分の格好を気にする余裕なんてあるんだろうか。気にしようとしまいと、自分の意思とは関係なくマンコ晒されちゃうわけだから、ええと……。

一回だけなら試していいかな。体験してみないと分からない事って多いし。

でも真佐美さんと山下先生に犯され姿を見られるのだけは勘弁。

「くっ……」

ちよつと何考えてるのよ。あたしは頭を振って妄想を振り払おうとした。

周りがレイプ堕ちた女だらけで、感覚がマヒしているに違いない。

取りあえず、明日の予習だ。

でも一度浮かんだ妄想は、濡れ落ち葉みたいに意識にへばりついて離れてくれなかった。

気合いが入らないまま勉強して、時計を見ると二十二時になっていた。

「気分転換しようかな」

あたしは散歩がてら、コンビニまで出かけることにした。

部屋着のまま生足のミニスカート。一応用心して人通りの少ない道は避ける。

途中の雑居ビルにさしかかった時、男の人に『お姫様抱っこ』された女の子が出て来た。

ゾロゾロと赤い顔の男女が後に続いて、歩道一杯に広がってたむろする。

多分近くの大学の学生だろう。女の子は完全に力が抜けて、腕がブラブラしていた。

「……酔っ払いか」

女の子はスカートの中が丸見えだった。大っきなお尻とたくましい太腿。

タイミングがいいのか悪いのか、あたしは集団に進路を阻まれた形で、彼女が車の後部

座席に連れ込まれる様子を観察することになった。

「女の子を介抱する時はあ、締め付けを緩めてえ」

別の酔っ払った女が彼女のスカートを捲り上げるのが見えた。

車の中であつという間に下着を降ろされる女の子。

力が抜けているから脚が最初から開き気味で、脚の間にクッキリとワレメが見える。

恥毛はあまり濃くないようだ。あたしと同じくらい。

「ほらあ、マンコだよ、マ・ン・コ。きゃはははっ」

男子学生たちが「おおっ」と喜んで取り囲む。

いい塩梅に車内に雑居ビルの照明が回り込んで、剥き出しの下半身が浮かび上がって見えた。

「やっちゃえばあ？ あたし押さえてあげてからさあ」

女の言葉に、数人が先を争って車に乗り込む。

たちまち始まる裸祭り。

人だかりの中に垣間見えるマンコ丸出しの女の子という構図は、カイボー現場に通じる眺めだった。

「嫌あ」と気の抜けた鼻声が聞こえた。

車のドアが閉まる直前、あたしはブラジャーを外された女の子の乳房がボロリとこぼれる瞬間を目撃した。プルンと乳房が揺れて乳首を天井に向ける。

あたしは酒臭い集団から抜け出して遠ざかっていく車を見送った。

「アレも輪姦になるのかな。抵抗するのは無理だろうけど」

輪姦の定義って何なのだろう。抵抗する女の子を押さえつけること？ それとも男が複数いること？

真佐美さんや山下先生がやられたのは間違いない輪姦だ。あたしがされたのはイタズラ。今の子はどうなんだろう。よく分からない。

集団から離れてコンビニに向かう途中、あたしは無造作に道路に落ちているパンティを

拾った。十メートルほど先にはブラジャーも。

「86のEね」

先ほどの乳房の印象と一致する。

拾ってしまった物は仕方ない。あたしはパンティとブラジャーをバッグに放り込んだ。

今まさにあの子はマンコを拡張されている真っ最中。女がいたから、間違いないクリトリスを剥き上げられる運命にある。もう剥かれてしまっているかも。

「ま、あたしがやられるわけじゃなし。どうでもいいか」

やっぱレイプづいている。そう思うけど、気にしてどうなるものでもない。

——そしてコンビニで買ったのは、内容がどぎついことで有名な女性向け雑誌だった。表紙に踊るレイプの文字に気を引かれて中を覗いたのが運の尽き。コンパで飲み過ぎて知らぬ間に輪姦される女の子のお話らしい。朝目を覚ますと、知らない部屋で下半身裸だったって怖い内容なんだけど、買わずにいられたかった。

あたし、変になりかけている。

自覚はあるけどどうしようもない。

モヤモヤした思いだけが募った。

山下先生がああ調子なので状況は悪くなる一方だった。被害報告だけがひたすら溜まっていく。

そんな憂鬱なある日。風紀委員会の活動に割と熱心な2年の坂下という子がいて、あたしとしては頼りにしていたんだけど、急に顔を出さなくなってしまった。

一年生の妹がJKクラブに嵌ってしまっていて困っている。彼女の口からそんな話を聞いたのはひと月ほど前だ。

このパターンはもしかして。いや、きっとそうだ。あたしの女の勘が告げていた。

坂下さんは輪姦されたのだ、と。

そして放課後の教室であたしは見てしまった。

坂下さんが真佐美さんにスカートの中に手を入れられているのを。

施錠確認の見回り中のことだった。

「エッチな子ね、もうこんな濡れちゃって」

スカートの中で真佐美さんの手が忙しく動いており、坂下さんは顔を天井に向けてハア喘いでいた。されるがままだ。降ろされた下着が足首に絡まっている。

あたしは山下先生が職員室で同じことをされているのを目撃したことを思い出した。

「うふふ、あんなに妹さんの前でヒイヒイ叫んで抵抗したくせに。女ってクリトリス剥かれて弄られるとアウトでしょ？ 沢山失禁しちゃったね」

「だ、だってえ……」

かぶりを振りながら坂下さんの脚が広がっていく。

「お乳も揉んで欲しい？」

坂下さんが頷く。真佐美さんが楽しそうにブラウスをはだけてペロンと乳房を露出させる。あたしよりも大つきくてちよつと悔しかった。

「はああっ」

指先で両乳首を摘ままれた坂下さんが仰け反っていい声を上げた。

やっぱりそう言うことか。坂下さんは妹の目の前で墮ちるまでクリトリスを弄くられたのだ。そしてイカされて意識朦朧のまま輪姦。あたしは脱力感に襲われた。

真佐美さんが片手で乳首を弄びながら、スカートを捲り上げる。

あたしの位置からも薄い恥毛の翳りがはっきりと認められた。

「また襲って欲しいよね」

陰裂の内側に潜った指先が蠢く。ワレメの中程から、坂下さんのクリトリス亀頭が芽のように頭を出した。

女のクリトリスって皮を被っていたり埋まり気味だったり、個人差があって剥くのは簡単じゃないはずなんだけど、本当にあっさり剥かれてしまっていた。

つまり真佐美さんの手にかかるのは初めてじゃないと言うこと。陰裂の内側に収まるク

リトリス器官の形状を予め知っていて初めて当たりをつけることが可能なはず。

多分、坂下さんが妹さんの前で輪姦された時に、真佐美さんの指でクリトリスを弄られたんじゃないかな。

「あああつ！ あああつ！」

廊下まで声を響かせて思い切り股を拡げる坂下さん。クリトリスの根元を真佐美さんにコリコリされているのだ。

あたしはシャーッという音と共に、坂下さんのマンコから小水が噴き出すところを見てしまった。

すごい勢いだ。放物線が離れた壁まで余裕で届いている。

「輪姦してえ！」

坂下さんが失禁しながら、もつとマンコを弄ってもらおうと腰を突き上げて叫ぶ。

「クリトリス、もつと弄って欲しいよね？」

「はああああつ」

坂下さんは答える代わりに大きく拡げた脚をビクンビクンと震わせた。

「今夜も来てくれる？ 妹さんと並べてクリトリス剥いてあげる。しっかり抵抗するんだよ？」

「剥いてえ！ 剥いてえ！」

何度も頷く坂下さん。

完全に牝堕ちした姿だった。

あたしは後ずさりして廊下を引き返した。

誰も彼もクリトリス。真佐美さんから始まって山下先生、名前を知らない茶髪の子、坂下さん姉妹。

みんな押さえつけられてクリトリスを弄られ、耐えられずに堕ちている。堕ちる前はごく普通の女性だったのに。

もし、あたしが襲われてしまったら同じことになるのだろうか？

あたしのワレメの中にもちゃんとクリトリスが収まっているのだ。

何人にも押さえつけられてしまったらどんなに抵抗したところで無駄だ。必ずクリトリスを剥かれてしまうだろう。

そして剥かれたクリトリスをネチネチと弄られてしまったら？

あたしはイカされてしまう。断言出来る。

イッているのに弄り続けられたら、もうどうしようもない。アウトだ。

イキ続けて理性が飛んでしまうに違いない。それこそオシッコ噴き上げて、膣穴からお汁垂らして、ついでに乳汁も噴いて。女である以上それは避けられない。

「あたしも落ちるのかな……」  
 段々包囲網が狭まってきている気がした。  
 逃げ切るのは難しいかも知れない。  
 そんな予感がしたけど認めたくなかった。

## 五、落ちた風紀委員

あたしは様子見と称して、日課のようにJKクラブの周りをうろつくようになった。  
 人目を気にしながら入って行く制服姿の女の子たち。数時間たつと、ふらふらになっ  
 うつろな表情で入り口から吐き出されては、人波の中に消えていく。  
 ブラウスに乳首の『ぽっち』が浮かんでも気にする様子もない。  
 ヒン剥かれて輪姦された直後だから、ノーブラのままなのだ。スカートの下はノーパン  
 に違いない。  
 膣穴から垂れるお汁が太腿を濡らしているのを見たことも一度や二度ではなかった。  
 女の子に共通するのは、満足げなメスの顔。

自らの意思で犯されイタズラされて、幸せ一杯なのだ。  
 「あたしも落ちちやおうかな……」  
 思わず口について出たつぶやきに驚いたのはあたし自身だった。  
 何を考えているの。本能のささやきを無理矢理振り払う。  
 頭を冷やそう。あたしは少し離れた河川敷の公園に向かった。  
 川沿いにベンチが並んでいて、考え事をするにはもってこいの場所だ。たまにジョギン  
 グや犬の散歩をする人たちが行き来するくらいで、邪魔も入らない。  
 たまに強姦事件の類いが起こることも事実なのだが。  
 「うわ、何!？」  
 ベンチの上に横たわる着衣が乱れきった女体が目に飛び込んできて、あたしは思わず草  
 むらに身を潜めた。  
 地べたにだらしなく座ってたむろする他校の女生徒が四人。  
 そして女体の横に立って女生徒たちと何やら言い争っているのは真佐美さんだった。  
 ベンチの上の女体は大の字で弛緩しており、乳房も女性器も曝け出した。  
 ワンピースを頭の上まで捲り上げられてくくられた、いわゆる茶巾状態。  
 「山下先生……」  
 あたしには分かった。

あれは山下先生で間違いない。

呼吸に合わせて緩慢に揺れる、メロンほどもある乳房。

ワレメの真ん中から直立して天を仰ぐ大粒のクリトリス。局部に恥毛はない。

DVDで何度も見てお馴染みの、山下先生の女体だった。

剥き出しのマンコは驚くほど濡れており、陰裂の下半分からベンチにかけて大量の白っぽいお汁が飛び散っている。膣穴からあふれ出るお汁はまだ止まっておらず、あたしの目にも流れ落ちるお汁の糸がくつきりだった。貝の舌みたいに蠢く小陰唇が卑猥だ。

乳房も乳汁にまみれて艶光りしていた。乳首なんか勃起してまるでほ乳瓶の吸い口だ。散々捏ねられたようで、乳房全体が赤みを帯びていた。

そして地面には五メートルほど真っ直ぐに伸びた失禁の痕跡。

あたしは山下先生が女生徒たちに襲われて乱暴され、悶絶させられた『事後状態』を発見したようだ。

山下先生が悶絶するまでクリトリスを弄られたであろうことは疑う余地もなかった。この先生ったらクリトリス女だし。どうせなら襲われ中の姿を見てやりたかった気もするけど……。

なぜ真佐美さんがいるのかは分からない。

「これから用事があるのに勝手に襲われても困る」

「あたしたちの知ったことじゃないし」

「つべこべ言うならあんたも同じ目に遭わせるよ」

真佐美さんと女生徒たちのそんなやりとりが聞こえてきた。

いくら真佐美さんでも四人相手にケンカする気はないだろう。あたしはそう思った。

JKクラブ被害者の草分けで校内ではある意味怖いもの知らずなところがあるけど、他校の生徒に通じるはずもない。

あたしは真佐美さんが逃げた後に取り残されないよう、避難経路を確認した。

グズグズしていたら、とっ捕まって山下先生の隣でヒイヒイ叫ぶ羽目になりかねない。そんなのは御免被る。

「一度市道まで逃げて、迂回して戻って山下先生を……」

マンコを晒した山下先生をそのまま放置するのも気が引けるから、『回収』しなくちゃ。茶巾にされたままじゃ誰かがほどこれるまであの格好のままだろうし。

膣穴晒して股を拡げた女なんて、犯して下さいと言っているようなものだ。

「なっ、何をする気なのッ」

周りを囲まれ腕を掴まれるに至って、ようやく真佐美さんは自分が不利な状況にあることを自覚したみたいだった。

いつもの自信に満ちた表情が消えてうろたえている。

「あああつ！」

真佐美さんが仰向けに引き倒された。パアツとスカートが舞って肉付きのいい太腿が乱れてもがく。白いパンティがまぶしかつた。

あつという間に腕をバンザイさせられ、肩を押さえられてブラウスのボタンを外されていく。

ジ・エンドだ。この体勢になった真佐美さんに逃れる術はない。

カイボーで捕まった子と同じで、ヒン剥かれて嬲られるのみ。

「……信じられない」

あの真佐美さんがこんなにあっさり捕まってしまふなんて。

あたしは目の前で裸に窆られる真佐美さんを茫然と見つめて突っ立っていた。

「ひいひいひいっ！ いやああああつ！ んんんっ！」

悲鳴を張り上げる真佐美さんが口を塞がれる。

「ほらほらあ、結構パイあるじゃんこいつ」

いくら信じられなくても、ブラの中に手を突っ込まれて乳房をつかみ出される姿が現実。

「ヒュ〜」

ブラのカップに乳房の下を引っかけられ、盛り上げられる。

カイボーをやる連中が『乳プリン』と呼ぶ体勢だ。

乳房の大きい女の子がこれをやられると、激しく乳房を踊らせてもがく羽目になる。

「んひいひいっ」

真佐美さんの乳房が期待通りにプルンプルン踊る。会員制エロサイトに公開されている

初輪姦シーンとそっくりの乳踊りだ。

悪たれたちが面白がって揺れる乳房を指先で追いかけて乳首をくすぐり、ますますもがかせる。

「威勢の割にはあつけないよねえ」

「マンコ出しちゃえ」

乳房に気を取られている真佐美さんには、防御する暇もなかった。

ズルツと下着が一気に膝まで滑り、露出したマンコに燦々と陽が当たる。

「なにこいつ、マン毛ないじゃん」

真佐美さんの恥部には恥毛がなかった。

すつきり爽やかな恥丘の白。深い陰裂が股間を縦に走っている。

JKクラブで恥毛を剃り落とされてからかなり経っているのに、完全にツルツルだ。多分、『出演』する時に剃られているんだろうけど。

「剃ってるんだよ。ちよっとポツポツあるし」

「カイボー食らって剃られちゃったとか」

「ありうる、ありうる」

「悔しいの？ 逃げてみたら？」

女生徒の一人が指先をプスリとワレメの頭の窪みに突き刺した。

「んんんっ！ んひひいっ！」

指が動くとワレメが引っ張られて伸び縮みする。

あたしも女だから、同性にこんな事をされる悔しさは理解出来た。

ワレメの頭の部分ってすごくくすぐったいのだ。

真佐美さんは腰をガクガク揺さぶり立て、必死で抵抗していた。

盛られた乳房をプルンプルンに踊らせて本気でもがくもがく。

でも刺さった指先は抜けなくて、マンコをほじられ放題。

あたしのマンコまでくすぐったくなって来そうな眺めだった。

「でかいマンコしちゃって」

女子は年に一度くらい保健の時間に出産ビデオを見せられるんだけど、看護婦に剃り上げられたマンコを処理される妊婦さんを思い出してしまった。

ワレメの頭って『取っかかり』になるから、当たり前前みたいに看護婦にワレメを指先で引っかけられてくいと引き伸ばされるのだ。

そうすればナマモノ全体が持ち上がりって扱いやすいらしい。まあ、その通りだろうとは思う。やられる側は悔しいだろうけど。

ビデオの妊婦さんもクリトリスが剥けちゃってたし。

「んひっ！ んひひいっ！」

真佐美さんがキィキィ悲鳴を上げる。

本当に惨め。

これまでJKクラブで散々いい思いをしてきたせいで、襲われたら自分も普通に哀れな姿を晒すしかないという当たり前のことに考えが及ばなかったんじゃないかな。

何十人も女の子を襲わせた張本人。

何十人も女の子の惨めな姿を観察し、自分も手を出した張本人。

何十人も女の子のクリトリスを弄り回して陥落させた張本人。

あたしも真佐美さんの目の前で痴漢にクリトリスを弄られ、イカされる姿を観察されてしまった経験者の一人だ。

だから、可哀想とか気の毒とかいう思いはなかった。

「んひひいっ！」

ワレメの頭に刺さっていた指先が少し下に降りて、もぞもぞ動く。クリトリスを探されているのだ。

「んひいいいっ！」

真佐美さんが激しくもがいた。

クリトリスを見つけられたらどうなるか分かっているから、それこそ必死の抵抗だ。ワレメの内側に潜った指先が動き回る。

逃れられっこない。あたしは思った。

押さえつけられ、股をこじ開けられた女に出来ることなんかないのだ。

「んきいっ！ ぶきいっ！」

ブルツ、ブルツ。はだけられた乳房が震えた。

真佐美さんがクリトリスを探り当てられた瞬間だ。

陰裂から飛ぶしぶきに光が当たる。

ワレメの内側でクリトリスをニルニルされて失禁してしまったようだ。

「ぶきいっ！」

クリトリスを弄られている女はすぐに見分けがつく。脚が勝手に拵がって腰が浮き上がってしまう。

真佐美さんも正にその体勢だった。

失禁して悲鳴を上げながら、大股広げてマンコをどうぞとばかりに差し出した姿勢に固まってしまふ矛盾。

あたしの位置から、クリトリスを弄られる真佐美さんの顔がはっきり見えた。

見開いた目は焦点が合っておらず、酔っ払いのよう。

悲鳴を撒き散らせる口は塞がれているけど、押さえた掌の隙間からヨダレが垂れている。

「効いてる、効いてる」

マンコをほじくっていた女生徒が、真佐美さんのワレメの中からクリトリス器官を摘み上げて露出させた。

綺麗に剥けたピンク色のクリトリスは、山下先生には及ばないけどあたしよりも大粒だ。

「んひっ！ んひいいいっ！」

剥かれたクリトリスを生でコリコリされる真佐美さんは半狂乱だった。

生体反応で乳首が両方ともピンと立っているのかと警戒したけど、全然普通じゃん」

「威勢がいいから空手でもやってるのかと警戒したけど、全然普通じゃん」

「あっさりクリ剥かれちゃって」

何度も腰を突き上げて仰け反る真佐美さん。

どうもがいたところで指もついてくるから、クリトリスを摘ままれた状況は変わらない。シュウツとかなりの量の小水が飛んだ。

「撮ってやるよ、顔向けて」

マンコを掻き拵げられた状態で構えたスマホに顔を向けさせられる。

もちろんクリトリス丸剥けで摘ままれたままで。

惨めな姿を撮影される真佐美さんの視線はスマホに向いているようでもあり、何も見えていないようでもあった。

クリトリスの根元をコリコリやられたままじゃ状況把握なんて無理かな、と思う。あたしも同じようにされたら、きつと似たような有様になるだろう。

それにしても、目の前で為す術もなくクリトリスを剥き上げられて失禁している女に、何人もの女性が堕とされていることが不思議だった。

襲われている真佐美さんは、どう見ても単なる女子高生だ。

真佐美さんが得意なのは言葉巧みに女の子をJKクラブに引き込むことで、力尽くで襲うわけじゃない。

だから自分が襲われちゃうような事態には無防備なんじゃないかな。

JKクラブで輪姦されると言っても、自分の意思で出演しているわけだから別物と言っている。

川の向こう岸に、ジャンパースカートの姿の女の子たちが七、八人立っていて、襲われる真佐美さんを指差してキヤーキヤー声を上げていた。近くの中学校の女生徒だろう。

距離にして十メートルちよつと。目がいい人なら表情まで見分けがつくくらいだ。

だから向こうからも真佐美さんのマンコが丸見えに違いなかった。もしかしたらクリト

リスも見えているかもしれない。

年下の中学生にまで襲われ姿を見られてしまって。みっともないなんてものじゃない。

「濡れてきたよ」

女生徒の声に膣穴に注目すると、白っぽいお汁が滲みかけていた。

乳汁はと思って目をこらしたけど、乳房が間断なく揺れ動くので分からなかった。でも何となく尖った乳首の先端が湿っているように思えた。

腰の位置はそんなにぶれないので、全開に広げられたマンコの中身はクツキリだ。

クリトリス器官が一番目立っていて、その下には小陰唇の輪。正に女の子って感じ。

「しつかり貫通済みじゃん」

クリトリスを弄られながら膣穴を調べられる真佐美さん。

処女じゃないと判定されるや、ズッポリと2本指を膣穴に突っ込まれる。

本人はずっとキィキィ叫び通しで、指強姦されたことに気付いていないっぽい。

しばらく抜き差しされてようやく「イヤァ」と叫んだが、やっぱりクリトリスをコリコリされる方に気を取られてろくに反応出来ない。

「んひいいいっ！」

クリトリスと膣穴を同時に舐られる真佐美さんは小水垂れ流しだ。

尻っぺたから水漏れみたいに小水が滴って地面を濡らす。

脚が広がって閉じられず、相手の顔の前にマンコをどうぞとばかりに差し出した体勢は変わらない。

もう、クリトリスを摘ままれ放題に摘ままれちゃってる。

襲われている真佐美さんの向こうでは、山下先生が意識を取り戻したようで、茶巾から脱出しようとしてもがいているのが見えた。

飛び出していた大クリは少し萎んだみたいだけど、まだ半分以上ワレメから頭を覗かせている。

乳汁まみれの巨乳が左右に揺れ動いていい眺めだった。

もう少しこの場に早く居合わせていたら、山下先生が真佐美さんと同じ姿になっている現場を見ることが出来ただろう。

見たかったな、山下先生が剥きクリ弄られて乳噴き上げている姿。

真佐美さんは多分、その現場を見ていたはず。

うう……。

あたしもあてられて下半身が熱くなってきたみたい。クリトリスが膨らんで穴が濡れる……ちよつとヤバイかも。

もし見つかって襲われたら、クリトリスを摘ままれた瞬間にオシッコ噴いてしまいそう。

「ねえ、何覗いてるの？」

「ひっ!？」

いきなり後ろから肩をつかまれたあたしは、息が止まりそうになった。

山下先生の襲われ姿をあれこれ妄想していて、全く無防備だったから尚更だ。

振り返るとそこには、真佐美さんを襲っている女生徒たちと同じ制服姿の二人組。

「こういうの好きなんだ？」

「エロい子。あんただって襲われたら同じことになるのにさ」

「あ……あ……」

とつきに言葉が出ない。

「キヤアアアッ」

やつと悲鳴を上げる事が出来たのは、二人組に抱え上げられてしまっただけだった。

「マンコ追加一丁」

「離してえええっ」

ジタバタ暴れながら真佐美さんの隣に連れて行かれる。

スカートが捲れ上がって下着丸見えのひどい姿になっていたけど、逃げることしか頭になかった。

襲われる、襲われてしまう！

「何この子」

「覗き女。そこ陰に隠れてたんだよ」

「もうマンコ提供してもらえないね」

「剥いちやえ、剥いちやえ」

「ひいひいひいっ！」

地面に降ろされるやいなや、真佐美さんにかかっていた女生徒たちも加わって、あたしはヒン剥きかけられてしまった。

あちこちから手が伸びてきて、もう何が何だか分からない。

叫びながら頭を振ると、すぐ横に真佐美さんの顔があった。

悶絶寸前までクリトリスを弄られて、焦点の合わない目をさまよわせる顔が。

嫌でも裸に峯られていく自分の『惨状』が目飛び込んでくる。

乳房が飛び出して青空を仰ぐ瞬間。

あたしはたちまち乳首を摘まみ上げられるのをこの目で見た。

抱えられて半開きでジタバタもがく太腿の半ばで降ろされたパンティ。

恥毛の薄い鬚りの向こうには、あたしのマンコを狙って向けられているスマホ。

「ひいひいひいっ！」

「こいつのマンコ、行儀良くお口を閉じてるじゃん」

どうしようもなかった。

たぶん襲われてから乳房とマンコを出されるまで、十秒とかかかっていないはず。

大量の生マンコ画像を提供させられてパニックのあたし。

対してクリトリス弄りから解放された真佐美さんは、徐々に瞳に理性が戻っていく。

もちろん表情の変化を観察している余裕なんかなくて、記憶の断片が時系列順に残っているだけだ。

「やめてええっ！」

飛び出したばかりの乳房を好き勝手に揉み回されてしまう。

向こう岸では女子中学生たちが嬌声を上げていた。

あの子たちにもスマホで撮られているだろうことは容易に想像がついた。

今のスマホは性能がいい。ちょっといい機種ならズーム付きのカメラが搭載されている。この距離ならば、剥き出しにされたあたしのマンコを画面一杯に撮影するくらいわけもないのだ。

最悪なことに、あたしはモロに向こう岸に下半身を向けた体勢で捕まっていた。

もう、丸見えなんてものじゃない。

剥き出しマンコの向こうに揉まれ乳房を添えて晒されているのも同然。

こんな姿を年下の子たちにまで見られてしまうなんて。

でもあたしに逃れる術はない。

「くひいっ！」

ワレメの中に指が潜ってきた。

柔らかい部分をまさぐられて腰が勝手に突き上がる。

こっちも女だから、相手が何をするつもりなのか本能的に分かった。

狙いはあたしのクリトリス。

「嫌ああああっ！」

クリトリスを探されながら絶叫するあたし。

もがいてもがいて、またもがく。

クリトリスを見つげられた女がどうなるか、さっきまで覗いていた通りだから。

あたしもああなる。それが分かるから必死だった。

乳房を揉みまくられながら、クリトリス器官を指で挟まれる。

同性がクリトリス探しに手間取るはずがないのだ。

「あひいっ あひいっ あひいっ あひいっ あひいっ あひいっ」

クリトリス包皮を引っ張られた。

指先が正確にあたしの三角フールドの切れ目にかかっている。

剥かれる、剥かれてしまう！

首を振った時に真佐美さんと目が合った。

哀れなクリトリス剥かれ顔を見られていることは分かった。分かったけどそれどころではなかった。

もがく脚を抱えられて捻げられた体勢で、包皮の下に隠れたクリトリス本体を掘り起こされてしまう。

「あひいっ あひいっ」

あたしは真佐美さんに顔を向けたまま、ひたすら絶叫し続けた。

誰か見つけて！

クリトリスが！ あたしのクリトリスが！

「真田さんたら、いい顔しちゃって」

真佐美さんの声が聞こえた。

「あくあ、お股ビショビショ」

どうやらあたしはクリトリスを剥かれながら失禁してしまっただけらしい。

でもまるで自覚はなかった。

言い訳させてもらえば、いきなり裸に筆られてクリトリスを剥き上げられたら、女子高生じゃなくなっちゃって失禁すると思う。カイボーにかけられた女の子の大半がオシッコを漏らしてしまうのは、クリトリスを剥かれる時だ。

「ほら、穴ヌルヌル」  
「エロい子」

膣穴が濡れていることを見つかって笑われた。  
同性の目はごまかせないから、襲われる真佐美さんを覗き見して濡れてしまったことがバレたと思う。

穴があつたら入りたい恥ずかしさだけど、クリトリス剥かれ中のあたしは悲鳴を張り上げるのに精一杯で、何も考えられなかった。

「ひいっ！ ひいっ！ ひいっ！ ひいっ！ ひいっ！」

「オシッコダダ漏れじゃん、この子」

「大体剥けたかな」

「もっと皮たぐって根元まで剥かなくちゃ」

太腿の内側がピクピク痙攣する自覚があつた。

腰が勝手に跳ね上がる感覚も。

「あひいひいひいひいっ 嫌あああああつ！」

剥かれる、剥かれてしまう！

あたしは必死で叫び続けた。

頭の片隅ではすでにクリトリス包皮を裏返されてしまったと分かっていたけど、叫び続

けるしかなかった。

「ひいひいひいひいっ！ むがっ！」

あまりヒイヒイうるさいので口を押さえられた時、向こう岸の女子中学生たちの笑い声が聞こえた。

クリ剥けてる。オシッコ噴いちやってる。穴見えてる。乳揉まれすごい。

耳を塞ぎなくなる言葉だった。

あたしは自分がどういう姿を晒しているのか思い知らされた。

先ほどまでの真佐美さんとそっくり同じ惨状になっているのだ。

「剥かれちゃったね、クリトリス」

その真佐美さんにまでからかわれる始末だった。

自分こそ剥けクリ摘ままれて絶叫していたくせに。

失禁して白目剥きかけてたくせに。

「んひいひいっ！ むがっ！ もがっ！」

視界の下半分に、逆光に反射して光る放物線が見えた。

薄い恥毛越しに、剥き上げられて押さえられているクリトリスの頭まで確認出来た。

拗げられてしまったマンコが引き攣る。誰かに小陰唇を引っ張られて遊ばれているようだ。

ああ、失禁が止まらない。

風紀委員長がこんな姿を晒しているのか。

いいわけがない。そんな事は承知している。

でも女である以上、襲われてしまったらこうなるしかない。

風紀委員長だろうが女教師だろうが一般生徒だろうが、押さえつけられてマンコを開かれてクリトリスを剥かれてしまえばこうなる。

ワレメに伸びた指先が、あたしのクリトリス包皮をたぐって押さえていた。

太腿のピクピクが止まらない。

根元までクリトリスを剥かれてしまっているに違いなかった。

「んひいいいっ！ んひいいいっ！」

スマホがあたしの身体のあらゆる部分を撮影していた。

マンコはもちろん、乳房も悲鳴顔も全部だ。

「ふふっ、いい顔してるわよ。すっかりクリトリス晒しちゃって」

また真佐美さんにかかわれた。

さっきまでクリトリスを摘ままれて白目を剥いていた女に言われたくない。

そう思ったけど、あたしは顔を覗き込んで笑う真佐美さんに向かって悲鳴を撒き散らせ

る他に出来ることはなかった。

「んひいいいっ！ んひいいいっ！」

更に視界にメロンほどもある乳房が飛び込んできた。

乳房の向こうには、同じようにあたしの姿を観察している山下先生の顔が。

いつの間に茶巾から脱出したのか、乳房をボロンと出したままあたしの横でかがみ込んでいる。

「んひいいいっ！ くひっ！」

ああ、山下先生にまで惨めな襲われ姿を見られてしまった。

「んああああっ！」

顔の横で、乳汁を滴らせる乳首が揺れていた。

真佐美さんも乳首の先っぽが湿っているのが分かった。

あと1分、クリトリスを弄られたら真佐美さんも乳汁を噴いたはず。

そう思うと悔しかった。

「んひっ！ くひっ！ んひっ！ んひっ！」

そして腰から脳天に突き上げる強烈な快感。

剥かれたクリトリスを摘ままれたのだ。

「んひいいいっ！」

ひとたまりもなかった。

ただでさえクリトリス包皮を裏返されて失禁しているところに、生クリを摘ままれる：

あたしは残尿を一滴残らず漏らしながら腰を突き上げた。勝手に身体が反り返った体勢に固まって動けない。

クリコリとクリトリスの根元を揉み込まれる刺激は半端じゃなかった。

「尿道口開きっぱなし」

「こいつ、すぐイッチャうんじやない」

脚が拵がって股関節が軋む。

断続的に襲いかかってくる電気ショックみたいな快感に抗うなんて、到底不可能だった。

「ああん、イキそう、イキそう」

「いや〜ん、イカされちゃう〜」

「んひっ！ くひっ！ んひっ！ んひっ！」

太腿に震えが来た。

もう駄目、限界。

対岸の女子中学生たちが「イクよ、イクよ」とはしゃぐ声が聞こえたけど、取り繕うことなんか出来るはずもなかった。

「あへええええっ！」

あたしのマンコに顔を寄せた真佐美さんが笑っていた。

あたしが覚えているのはそこまでだ。

きつとイッてしまつて理性が飛んだのだと思う。

真佐美さんや山下先生、他校の生徒たちが入れ替わり立ち替わりクリトリスを摘ままれるあたしの顔を観察しに来たらしく、その様子が映像の断片として記憶に残っている。

「あくあ、マンコ穴お汁まみれ」「見て、乳汁噴き始めたよ」「クリトリス艶光りしてる」

「アへっちゃつてすごい」 そんな声も途切れ途切れに聞こえていた。

多分連続した時間上じゃなくて、クリトリスを摘まれてイカされている中で意識が浮上した瞬間に聞こえていたことを覚えているんだと思う。

どれだけの時間クリトリス弄りされてしまったのか、まるで見当もつかない。

襲われたあたしは最終的に「膣穴から大量のお汁を垂れ流し」、「乳汁を噴き」、「イカされて正体なくアヘりまくって悶絶した」のだ。それだけは確かだった。

お汁垂れ流しになったと言うことは、少なくとも『瞬殺』ではない。五分か十分、あるいはそれ以上クリトリスを摘まれて弄られた結果だと思う。

あたしの惨状は、他校の生徒たちと対岸の中学生たちのスマホに記録されていること

だろう。

気がつくとあたしは草むらの中に横たえられていた。着衣が乱れきった、襲われた時の姿そのまま。

右と左に、臍口周辺がお汁で真っ白に濡れたマンコがあった。片方のマンコは大きなクリトリスが飛び出してツヤツヤ光っている。どちらも恥毛はなく、ツルツルだった。一つは真佐美さんのマンコ、クリトリスが飛び出している方は山下先生のマンコ。二人とも、あたしが悶絶してしまった後で『続き』をやられてしまったことは明らかだった。

身を起こそうとしたけど、腰がとろけてしまっただけ動けない。痴漢にやられた時の比じゃなかった。

「もう……知らない」

あたしは着衣を直すわけでもなく、空を見上げてぼうっとしていた。

しばらくして真佐美さんが目を覚まし、続いて山下先生のうなり声も聞こえたけど、どうでもよかった。

「あの子たち、本当に容赦ないわね。クリトリス剥きから再開されるとは思わなかったわ」

真佐美さんがぶつぶつ言う声が聞こえた。

ああ、何だか眠い。

あたしは大の字で目を閉じた。

意識が吸い込まれる。

襲われてから、あたしの中で何かが変わった。

目覚めたと言った方がいいかもしれない。

認めたくなかったけど、認めざるを得なかった。

学校から帰ってすぐにはオナニー。

我慢出来ないのだ。

下着を脱ぎ捨ててベッドに大の字になり、マンコを出してワレメをクチュクチュ掻き混ぜる。

イクと乳汁が出てしまう身体になったので、最初にブラを抜いて乳房をはだけておかないと、一回でブラが乳まみれになってしまう。

オカズはもちろん……襲われた時のこと。

あたし自身がされたことはもちろんのこと、襲われている真佐美さんの姿やあらゆる

い山下先生の姿もオカズになった。

やり方は襲われた時と同じように、徹底的にクリトリスを剥いて弄る。伊ッても指を止めない。

そして自分で自分を悶絶させるのだ。

クリトリスが直立して脈打ち、乳首も脈打ちながら乳汁を噴くくらいになると、意識が朦朧として襲われているのかオナニーしているのか分からなくなる。

一度体験してしまうとやみつきになった。

授業中も何だかモヤモヤして、頭の中はエロい妄想ばかり。まるつきり痴女みたいな有様だった。

決定的だったのは見回り中に3年生の教室でカイボー現場を見つけた時だ。

捕まった女の子はあたしが見つけた時はすでにマンコを出されており、脚を拡げられてしまっていた。

乳房もはだけられていて、けたたましい悲鳴と共に揺れまくっていた。

カイボーの目的はマンコ晒し。女の子は必ずマンコを拡げられる。

そうして恥ずかしいナマモノをスマホで撮りまくられ、時には弄くられて失禁させられるのだ。

もがきながらクリトリス包皮を剥かれる女の子の姿を見た時、あたしは何も考えられなくなってしまう、トイレに駆け込み夢中でオナニーしていた。

自分でクリトリスを剥き、失禁するのも構わず弄くり回すのを止められなかった。

襲われたい、襲われたい、襲われたい！

あたしもクリトリスを剥かれて悲鳴を上げたい！

強烈な欲求だった。

あたしはすんでの所でカイボー現場に戻って、あの女の子の身代わりに襲われるよう仕向けるところだったのだ。

簡単なことだ。ちよつと生意気な物言いで挑発してやればいい。

そうすれば「2年のくせに」と襲いかかられるはずだから。

そうしなかったのは伊ッてしまっただけで動けなかったから。それと失禁で下着が濡れたせいでパンティを脱ぐしかなかったから。

あたし、どうなってしまったんだろう。

答えに気付いているのに自問自答してみた。

——あたしは落ちたのだ。

それを自覚すると、もう身体が理性の声を聞いてくれなかった。

数日経って、風紀委員室で書類整理をしている時のこと。扉が開いて山下先生と真佐美さんが入ってきた。山下先生が自分からやって来たのは輪姦騒ぎ以来のはずだ。三人まとめて襲われてから顔を合わせるのを避けていたせいで、ちよつとどぎまぎしてしまう。

「あれから調子はどう？」

「ふ、普通です」

調子とは？ 身体のこと、それとも気持ちの変化の方？

あたしはどう答えていいのか分からなかった。

内心を見透かされている気がして、構えてしまう。

二人ともクリトリスを弄られて墮ちた女。だからあたしのことも予想がついているのだろうと思った。―― 事実、その通りなんだけども。

「警戒しちゃって。襲われ仲間でしょ、私たち」

真佐美さんに背後から乳房を揉まれてしまう。

「あっ……」

普通なら「やめて下さい」と叫ぶところなのに、あたしは身体の力が抜けてしまって何も言えなかった。

「ふふっ」

真佐美さんの手が制服の裾から入ってきて、あたしのブラジャーをずり上げる。

「ひゃ……」

乳首を生で摘ままれ、変な声が漏れた。

さらに山下先生に制服をはだけられ、あたしは乳房丸出しに。

「ああっ……」

目の前で乳房が揉まれてひしゃげているのに抵抗出来ないのは何故。信じられない思いだった。

「真田さん、苦労かけてごめんね」

耳元で山下先生が囁いた。

「あ、あ、あ、後だから白状するけど、私、輪姦されてしまったの。真田さんは知らないでしようけど」

知らないも何も、山下先生の輪姦DVDはあたしのオナニーのオカズだ。

「本当に必死で抵抗したのよ。でも女って駄目ね、クリトリスを剥かれて弄られてしまったらもう……」

山下先生の手が下着の中に入ってくる。

「私を墮としたのは真佐美ちゃん。徹底的にクリトリスを揉まれちゃったんだから」

それも知っている。

股をこじ開けられた山下先生は、真佐美さんに大きなクリトリスを剥き上げられて『料理』されたのだ。

乳汁を嘔き、失禁して膀胱が空になってなおクリトリスを弄られ続ける山下先生。膣穴からお汁を滴らせて半狂乱でアへる姿は、あたしの最高のオカズだ。

その山下先生に陰裂をなぞられながら、あたしはやはり抵抗出来なかつた。

「あんな目に遭った女は絶対に忘れられない。そう思わない？」

「……」

「だったら無理に我慢する必要なんかないでしょ」

賛成だった。

自分が襲われた以上、苦勞して他の子が襲われるのを止める必要性が分からない。

襲われた女生徒はみんな、自分の意思でJKクラブに出入りしているのだから。

風紀委員だからと止めようと頑張っていた自分が馬鹿みたいだった。

いや、実際に馬鹿だったのだ。

マンコを弄られるのは気持ちいい。

無理矢理だってマンコを弄られた女はイク。

それは女である限り逃れられない宿命だ。

この場にいる全員が証明している。

もう風紀委員の肩書きなんてくそ食らえだった。

やがてあたしは山下先生の指先にクリトリスをくるくる刺激されながら、股を広げて天井を仰いだ体勢に。

真佐美さんに下着を脱がされてマンコを拡げられても、あたしは何も出来なかつた。

勃起したクリトリスを剥かれ、はしたない声が漏れるのを押さえられない。

「来るよね？」

真佐美さんが顔を近付けてきた。

主語を省略されていてもあたしには理解出来た。

無言のまま頷く。

「じゃあ、このまま三人で店に向かおうよ。先生もいいでしょ」

「もちろん。みんなで女の晴れ姿を見せましょうか」

襲われ姿は女の晴れ姿か……。

言い得て妙ではある。

こうなる運命だったのかも。

あたしはそつとため息をついた。  
「仕方ない」と自分に言い訳をするために。

〓 P S 〓

「嫌あああつ！ やっぱり帰るうううつ！」

その三十分後。

J Kクラブのステージの上で真田遥は絶叫していた。

ああ言ったものの、実際に輪姦されると怖じ気づいてしまったのだ。

「ヒイイッ！ 嫌あああつ！」

身体は人だかりに埋もれ、時折猛烈に抵抗する女体が垣間見える。

ヒン剥きかけられる風紀委員は必死の抵抗だった。

しかし所詮は多勢に無勢。

筆られたブラジャーやパンティが、景気よく空中に放り上げられて舞う。

「んひええええつ！ あああああつ！」

「どんな感じだった？」

「マンコ開かれて、両乳首をチュウチュウ吸われてたわよ」

四つん這いで人だかりの中に突撃して偵察してきた真佐美が報告した。

「クリトリス剥かれてたから、これから舐められるはず」

「それじゃあイカされちゃうわね」

山下先生が笑いながら頷く。

今はキイキイ、ヒイヒイと悲鳴がやかましいけど、じきにアへ声に変わるだろう。

「あひいいいいつ！」

人だかりの中から突き出した女の膝下が、不規則にビクンビクンと痙攣するように動く。

これはクリトリスに吸い付かれた女の反応。

真佐美と山下先生が顔を見合わせて口元を吊り上げた。

「真田さんもお堅い風紀委員だったのにねえ」

「我慢出来て三分つてところかな」

「その前に失禁しちゃうでしょうね」

「誰かあああつ！ 帰るうううつ！ ヒイイッ！」

「ふふっ、元気ねえ」

「クリトリスを吸われて平気な女なんていないわよ」

完

ヒイイイツ！

あひいひいひいっ！

嫌あああつ！

キイイイツ！

くひっ！ んひいっ！ あひえっ！

んふっ！ やめてええええっ！

んああああああ……

ひいっ、ひいっ、ひいっ……

だ……誰か……

私のマンコが……私のクリトリスが……私の乳首が……

ああ、イカされる……イカされてしまう……